
僕たちのプレイボール

元球児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちのプレイボール

【Nコード】

N5819C

【作者名】

元球児

【あらすじ】

高校球児憧れの場所『甲子園』とは全く無縁、地方の公立高校の弱小野球部で繰り広げられた部員たちとダメ監督のお馬鹿で熱い抗争の日々の記録。

〈甦る悪夢の日々〉

憧れの晴れ舞台『甲子園』を目指して、一年365日休みなく泥と汗にまみれながら

一心不乱に白球を追いかける高校球児たち。

何を隠そう私も10数年前は、そんな高校球児の一人でございました。

・・・いや、それほど熱くはなかったですが。

そもそも身をわきまえていた私は甲子園なんぞ、はなから目指してはなかったですから。

それでも、小学校から続けていた野球を辞める理由も特になく

他にやることも無いから高校でも野球部に入っとくか、くらいのものんでして。

しかし、こんな高校野球に対する適当な感じの姿勢が

後に、私の人生の中で最低の経験と言っても過言ではない、天敵との出会いを引き起こし、

自分自身の高校野球生活を最悪の方向に導くことになるうとは・・・。

地方の弱小高校野球部にも知られざる熱い闘いがあったのです。

それは、今思い出しても腹が立つくらい悪夢の日々でございました。

小学生のころからどっぷり野球漬けの毎日を過ごしていた私。

小学3年生で入団したチームは、市内では負け知らず

(と言っても、地方の片田舎ですので

市内に野球チームは3チームしか存在しなかったのですが・・・)

県でも1、2を争う強豪で、全国大会にも出場するほどのチームで、

私はセンターのポジションでレギュラーでございました。

そして小学生の頃のチームメイトが、ほとんど同じ中学に進学したこともあって

私たちの中学の野球部は、市内では負け知らず

(と言っても、地方の片田舎ですので

市内に中学校は5校しか存在しなかったのですが・・・)

県大会でもベスト4以上に勝ち進むのが常というチームでして、

私はショートのポジションでレギュラーでございました。

そして、中学生3年生として最後の大会を県大会準優勝という結果で終えた夏。

しばらくは、野球漬けの日々からの開放感に浸りっぱなしでございましたが、

夏休みが明けると

自分が高校入試を控えた受験生である事実を思い出さずにはいられません。

15才の私は、自分が進むべき高校の選択に迫られるわけです。

そんな私が高校選びの際に重要視したのは、

野球部に入部したとして、1年生でも試合に出られそうな高校。

だって、どうせ野球やるなら試合に出られないと楽しくないし・・・。

他にやりたいこともないので、高校でも野球部に入るとは決めていましたが、

部員数の多い強豪校で補欠からのし上がって甲子園を目指す・・・などという

高校野球に対する熱い情熱のようなものは、あいにく持ち合わせていなかった私。

実際に高校進学に関しては、私立高校の野球部から有難いお誘いも受けましたが、

（特待生とかの飛びぬけたレベルではなく、

入試、セレクション免除と言う程度でしたが・・・）

強豪校に行ったところで、レギュラーになれる保証はないし・・・。

何せ中学の3年間で成長期の予兆っぽいものすら訪れなかった私の身長は、

中学入学時からほとんど伸びることはなく、

・ 朝から丼飯2杯、3杯食っても体重は一向に増える気配を見せず・

といった状況でしたので、私は自分の野球人生の限界を悟っており
ました。

で、私が選んだのは、どちらかと言えば進学校で名の通っていた公立高校。

家から近くて通学も楽だし、何よりも

甲子園を目指そうなどと言う熱い連中が、その高校に進むとは思えなかったのだ

そこなら早くレギュラーになれると目論んだわけです。

でも今思えば、この進路選択自体が大きな間違いだったのかも・・・

($\sim$)
($\sim$)
($\sim$)
($\sim$)

いざ、高校野球部へ

中学での野球生活を全うした後は

受験勉強をのりくらりとこなし、何とか志望の公立高校に入学した私。

予定通り野球部に入部し、晴れて高校球児とあいなったわけでございます。

この年の我が野球部の新入部員は全員で7名。

公立校の弱小野球部ですので、それ程部員は集まらないのです。

揃ったメンバーは、

がっしりとした体格で勝気な性格、キャッチャー志望の古木。

ニキビだらけで顔が月面の様にでこぼこな、外野志望の谷崎。

生真面目で渋さが売り、内野志望の柿里。

不器用で180センチを超える長身だけが取り柄、ピッチャー志望の松川。

90キロを超える体重で気は優しく力持ち、中学時代は代打の切り札？の山上。

中学時代は万年補欠、部活動は参加することに意義がある渡海。

そして、早期のレギュラー獲得を目論む内野志望の私、畑中。

仲間たちと高校野球生活をスタートさせた私。

1年生で早々とレギュラー獲得！という目標をたてて入部した弱小野球部でしたが、

現実はどうそう思い通りにはいかないもので・・・。

いくら弱小とはいえ、そこは腐っても高校野球部です、それなりに厳しい練習をするわけで。

入部してからしばらくは練習についていくのが精一杯でした。

と言うのも前にも書きましたが、高校野球に対する情熱っぽいものを、

あいにく持ち合わせていなかった私。

中学3年生の夏に野球部を引退してからは、まったく野球から離れて遊びほうけていたわけで。

それでも超高校級の清原や桑田ばりに（ちょっと例えが古いですが・
・・）

体格や元々の素質がずば抜けている選手なら、

地方の弱小野球部でレギュラーを奪い取ることくらい、

目をつぶって綱渡りするより簡単なことかもしれませんが、

私には誰もが羨むほどの体格も全国レベルの素質もなかったわけで。

その上半年以上も、野球の練習どころか体力づくりさえやっていないのですから

そんな奴が、すぐにレギュラーになれるほど高校野球は甘くはありません。

でも、弱小野球部ですのでそれほど厳しいわけでもありません。

我が野球部は夏の大会を早々と敗退し、2年生と1年生の新しいチーム体制になると

私はすぐさまサードでレギュラーになり背番号5番を頂きました。

出来れば中学時代にやっていたショートの方がよかったのですが、

そこはチーム事情というやつでございます。

何はともあれ予定通りレギュラーを獲得し、

それから半年ほどは順調な高校野球生活を送っておりました。

しかし、2年生に進級すると事態は急変するのでございます。

(つづく)

く天敵現る!!!く

3年生が引退した後の新チームになって、とりあえずは当初の目論見どおり

晴れて1年生でレギュラー獲得とあいなった私。

この時点で私らの学年からは

キャッチャーの古木と二人だけがレギュラーに昇格しておりました。

1学年上の先輩方4名が気の毒にも控え組にまわったのですが、

そこは弱小野球部とはいえ実力勝負ということで、

先輩方も納得されていたようでございます。

それから半年ほどは、それなりにキツイ練習をこなし、

大会や練習試合にも当然出場し、

勝ち続けることもなく負け続けることもないという程よいチーム状況の中、

私自身も主力メンバーとして、それなりの成績を収めておりました。

そして高校野球生活2度目の春。私はめでたく2年生に進級。

新学期初日、始業式の日を迎えました。

生徒たちが進級すると同時に、公立高校では教員の移動なるものもあるわけで。

この年も数名の先生方が我が高校を去り、

入れ替わりで数名の先生方が我が高校に赴任してこられました。

新しい先生方の紹介も含めた始業式を終え、

グラウンドで新学年として初めての練習の準備をしていると

そこに現れたのは、野球部監督の澤地先生。

監督なのですからグラウンドに来るのは当然なのですが、

この日は、身長は190センチを余裕で超えているであろうと見受けられる

大男と一緒にございました。

その大男は、新しく赴任してきた権藤と言う名の体育教師。

始業式で全校生徒に挨拶された際には、その身長もさることながら

面長でそこそこ風貌の見てくれと、低いこもり気味の声が

往年の人気レスラージャイアント馬場を彷彿させ、

男子生徒を中心に注目を集めた人物でございます。

化学が担当の澤地先生は白衣姿。

体育教師の大男はタンクトップに丈の短いピッチピチのホットパンツ姿。

並んでグラウンドに立つ場違いな二人の格好を見て、

「ここは野球部の練習場ですが・・・？」

と、突っ込みたくなったのは私だけではなかったはず。

しかし、そこは礼儀を重んじる高校球児です。

すつとんきような格好の二人に対して全部員が直立で帽子をとって
大声であいさつ。

すると、

「みんな集合してくれるか。」

と澤地先生。

間髪いれず、キャプテン沼田さんの

「集合!!」

という大きな号令で全部員がダッシュで監督のもとへ集合。

・・・あらためて振り返ると、

体育会系の部活って何となく軍隊じみたところがありますなあ。

で、整列した部員たちを前に澤地先生は静かに話し始められました。

「えー実は私、野球部の顧問を退くことになりました。

それで、こちらにいらっしゃる権藤先生が

私に代わって野球部の顧問になられます。」

寝耳に水の私たち部員はノーリアクション。

まあ、澤地先生は毎日熱心に練習を見に来られる感じではなく、

練習内容も私たち部員が考えてやっていましたので、

顧問を退かれると言っても、部員たちは

自分たちにそれ程影響はないと思っていたというのが実際のところだと思います。

そんな部員たちのノーリアクションぶりもお構いなしに話し続ける澤地先生。

「権藤先生は体育の先生ですし。見ての通りの立派な体格で、

若い頃はレスリングで国体出場を目指していた程の方です。

化学が専門の私よりは、監督として君たちの身になる指導をして頂けるでしょう。

これからは権藤新監督の下、甲子園を目指して切磋琢磨して頂いて下さい。」

ん？

レスリング？

僕ら野球部ですが・・・？

などという疑問を抱いたのは私だけではないはず。

その後、大男は新監督就任の挨拶。

結局、本人からも野球経験についての発言は聞かれずじまいでございました。

まあ今思えば、野球経験や野球部の指導暦に特筆すべきものがあればこの時点で話をしないわけはありませんわなあ。

かくして我が野球部は、野球経験も指導経験も未知数の大男に舵を

預け、

新しいスタートをきることになったのでございます。

これが悪夢の日々の始まりでした・・・。

づく

（

「新監督ついに動く！」

得体の知らない大男が新監督に就任し、新スタートをきった我が野球部。

就任初日は軽い挨拶程度で私たちの前から去っていった大男は、

翌日から部員の誰よりも早くグラウンドに現れるようになりました。

我が野球部の練習は、部員たちが考えてメニューを組むというのが
前監督時代の形でございまして、

- 1 ランニング、ストレッチなどウォーミングアップ
- 2 ダッシュ、中距離走
- 3 キャッチボール
- 4 トスバッティング
- 5 フリーバッティング、バント練習

※平行して、交代でウェイトトレーニング・ティーバツティング

6 ノックなど守備練習

7 ウェイトトレーニング

8 ダッシュ、中距離走

9 ランニング、ストレッチなどクールダウン

ポジションや日によって流動的ではあるものの、
基本的にはこんな感じの内容でございました。

何せ、公立の進学校のナイター設備も整っていないグラウンドで、
時間も放課後の午後4時頃から午後8時頃までという限られた環境
の下での練習です。

自分なりに効率を考えてメニューを組んでおりました。

これだけでは中々伝わりにくいかもしれませんが、

それなりにキツイ練習内容をこなしていたと思いますですよ。

弱小野球部ゆえ、

甲子園なんぞ夢のまた夢だということは全部員の共通認識でございましたが。

不思議なもので、

だからといって決して楽な練習で済まそうということにはならんのですな。

弱小とはいえ試合に負ければそれなりに悔しいし、たとえ甲子園に行けずとも、

出来る限りを尽くして試合に勝ちたいという思いで自分らなりの目標を立て、

それに打ち勝つべく厳しい練習に耐える日々を送るのでございます。

で、新監督の大男は初めのうちは、そんな私たちの練習に特に口出

しすることもなく、

グラウンドの隅にあったバーベルやダンベルなどのトレーニング器具で自らの筋力アップに勤しんでおりました。

そして、めでたく新入生の中から10名の新入部員を迎え、

大男も新監督就任から1週間経ったある日のことです。

いつも通りに練習をこなし、私たちはフリーバッティングを開始しておりました。

フリーバッティングの流れは、3年生のレギュラー組から始まり、2年生のレギュラー組、3年生の控え組、そして2年生の控え組という順番で、

1人15本から20本ずつ打って交代。

その間に、交代でティーバッティングやウェイトトレーニングを平行して行うといった感じでした。

その日も3年生のレギュラー組からフリーバッティングを開始し、
ちょうど2年生のレギュラー組、つまり私と古木に順番がまわって
きた時でした。

それまでバールが設置されたベンチに腰掛けてバッティング練習
を見ていた大男が

「おい、全員集合お！」

と、号令一発。

予想していなかったタイミングでの号令に皆一瞬反応できず、
ちょっと間をおいて、キャプテン・沼田さんの

「集合!!」

という号令で、全部員が大男の前にダッシュで集まり整列。

これから、大男の破天荒な指導ぶりが始まったのでございます。

(つづく)

「驚きの指令」

フリーバッティング練習を中断してまで、全部員を集めた新監督の大男。

「お前ら、全員ベンチプレスやってみい。」

それまで私たちの練習を見ているだけだった大男から

部員に対する初めての指令でございました。

言われるがまま、

とりあえず3年生からバーベルが設置されたベンチに仰向けになりベンチプレス開始。

バーベルの重量は50キロから始まり、3回持ち上げることが出来

たら

2順目は55キロ、3順目は60キロといった具合に5キロずつ重量を増やしていく

いわゆる勝ち残りのような要領で進められていきました。

次々と脱落者を出しながら、レギュラー組メンバーは

75キロでギブアップした2年生キャッチャー古木を最後に全員脱落。

その後残ったのは、控え組メンバーから

180センチ近い身長で体重も90キロはあろうかという2年生の山上。

そして入部したての1年生から、山上に勝るとも劣らない体格の持ち主の松崎。

見た目からして順当な二人の勝ち残りでございました。

この二人は結局85キロを持ち上げるところまで粘り、全員が終了。

その間、何やらメモを取りながら部員たちのベンチプレスを見ていた大男。

山上と松崎がギブアップしたところで再び部員たちを整列させ、

いよいよその傲慢振りを発揮し始めたのです。

「何じゃお前らは、非力じやのう。」

大男の生まれが何処なのかは結局最後まで確認しませんでした。彼の訛りは、私たちの地方の方言とは全く違うものでした。

「明日からフリーバッティングは、今のベンチプレスで残った順番に打てい。」

力のあるもん順じゃ。」

ええーーーーっ!?

この指令には全部員びっくりでございました。

前にも書きましたが、

我が野球部のフリーバッティングはレギュラー組から順番に打つのが慣例、

(おそらく多くの高校野球部がそうだと思うのですが)

大男の指令通りにするならば、控え組の2年生の山上と1年生の松崎が

レギュラーの3年生を差し置いて真っ先にバッティング練習を行うことになります。

まあそれまでのフリーバッティングも、結局は全員が打てるようにはしていたので、

打つ順番の意味はあるようなないようなといった感じだったので
が・・・。

何せ山上は、中学3年間で一度もレギュラーを獲得できず代打の切り札的存在だった男。

それも、滅多なことでは切られることのない切り札。

そして1年生の松崎は、野球は好きだけど得意ではないというタイプでございます。

そんな二人の予想外の昇格に、本人たちの戸惑い振りも尋常ではありません。

さらに、大男の指令はこれだけではありませんでした。

「ほいで、65キロも上げられなかった非力な奴は打たんでええ。ずっと筋トレやっつけい。

守備練習もなしじゃ。」

ええーーーーっ！？

これには部員たちもさらにびっくり。

と言うのも、大男が言う非力組にはレギュラーメンバーが4名も含まれているのです。

セカンドの福良さん、ショートの大井さん、レフトの崎野さん、そして、サードの私もしつかりノミネート。

レギュラー9名のうち4名に下された、打撃練習および守備練習禁止令。

そんなもの誰も納得いくわけがありません。

そして戸惑う全部員の視線が、キャプテンの沼田さんに注がれます。

その熱い視線の意味は痛いほど理解していたであろう沼田さん。

意を決しての発言です。

「・・・監督。」

「なんじゃ？」

「今までフリーバッティングは、レギュラーから順番に打つ流れでやっていたんです。」

それにレギュラーメンバーが4人も守備練習に参加出来なければ、シートノックとか実践的な練習が出来ないと思うんですけど。」

部員たちの、無言ながらもこれでもかと言わんばかりの後押しを受けて

キャプテン沼田、精一杯の抗議でございました。

すると大男はゆっくりと沼田さんに近づいたかと思うと、その横っ面に

バシッ！！

と豪快な張り手一発。

ええーーーーーっ！？

(っづく)

〔強権発動宣言〕

大男から非力のレッテルを貼られた、レギュラーメンバー4名を含む10名の部員に対する

実質、練習禁止という指令。

受け入れるには、是非とも説明を頂きたいものでございます。

ところが、部員の無言の後押しを受けて抗議を行ったキャプテンの頬に見舞われた

大男の豪快な張り手。

いやあ、言葉より先に暴力というのは、昔ながらの典型的な体育会系ですなあ。

最近は今々ニュースとかで、

何処ぞの高校野球部の監督が部員に暴力をふるって謹慎！とかいう

話も聞きますが、

そんな話、全国の高校野球部をきっちり調査したら

今でもゴロゴロ出てくるのではないのでしょうか。

でも、甲子園に出場する可能性のない弱小野球部の問題なんか

今も昔も高野連はとりあってくれないのでしょうかねえ、だってキリがないもん多分……。

で、いきなり殴られ当然の事ながら驚いた様子のキャプテン沼田さん。

その表情からは、かつての名作アニメ、機動戦士ガンダムの主人公・アムロが発した

「ぶったね！ 親父にもぶたれたことないのに！」

という名セリフが聞こえてくるようでした。

「レギュラーが参加せんと、実践練習が出来んじゃと？」

「はい・・・。」

返事をする沼田さんの声は、怒りと恐怖で多少震えておりました。

「そのレギュラーというのは誰が決めたんじゃ？」

「それは、前監督の澤地先生と部員の間で・・・。」

すると、大男は部員全員に睨みをきかせるように見回しながら言い

ました。

「ええか、今の野球部の監督はワシじゃ。ワシが来る前の決まりごととは全部白紙やと思え。

レギュラーもワシが決める、1年生も3年生も関係ないわ。」

なんですとおーーーーー!?

それは、あまりにも力強い強権発動宣言でございました。

（亀裂）

レギュラーメンバー4名を含む10名の部員に対する、実質的な練習禁止令。

加えて、今までの野球部の決まりごとは練習方法、レギュラーメンバーなど全てを白紙！

という、新監督のいきなりの強権発動宣言。

まあ、チームというのは監督の下で動くものですから分かんんでもないですし、

1年生を含めた全員でレギュラーを競うというのも決して悪いことだとは思いません、

しかし、いくらなんでも突然でやり方が乱暴すぎる・・・ということで、

これは部員たちも黙って受け入れるわけにはいきません。

大男の張り手に意気消沈気味のキャプテン沼田さんによって突破

口を開いたのは、

3年生でセンターを守っている川尻さん。

「ちょっと待ってください。

こないだの春季大会も今のレギュラーメンバーでいい試合が出来たし、

今はそのメンバーで来月の大会に向けて一生懸命頑張っていると
ころなんです。

レギュラーを競うと言っても、1年生は入部したてで

バッティング練習にも参加してませんし……。」

「アホかお前は。

1年生を練習に参加させとらんのはお前らの勝手な決め事のせい
じゃろうが。

これからは全員で競い合ってレギュラーを勝ち取れ言うとなん
のじゃ。」

この意見に関して言えば、ごもつともの事で異論はございません。

しかし・・・。

2年生のキャッチャー、古木が声を荒げ気味に続きます。

「でも10人はバッティングにもノックにも参加できないんですよ。ね。」

今のレギュラーから4人も抜けることになるし、どうやって皆で競いう合うんですか!」

「残ったのが20人近くもおるじやろうが。」

非力な奴は、まだレギュラーになれる資格すらないいう事じゃ。」

な、な、なにをー！ー！？

この言葉に反応したのが私でございます。

「あ、う、すみません。」

「何じゃ？」

「と言う事は、レギュラーは野球の実力ではなく力比べで決まるという事ですか？」

「そうじゃない。パワーがあつて野球の実力もあるもんがレギュラーじゃ。」

「でも、パワーがあつても野球の実力はない奴は練習に参加できないのに、

パワーはないけど野球の実力がある奴は練習に参加できないんですよ？

何か不公平じゃないですか。」

パワーがあつても野球の実力がないと言われた数名の部員の中には頭にきた奴もいたかもしれませんが、

こちらも頭に来てるのでつつい勢いで言っていました。

「何じゃお前は、不満なんか？」

「不満というか、レギュラーは野球の実力で決めてほしいと思うだけです。」

今のレギュラーも野球の実力で決められたものですし。」

「練習に参加できんのが悔しかったら、パワーをつけい！」

「悔しいというか、僕はウェイトリフティング部員ではなく野球部員なので、

ベンチプレスだけではなく、野球の練習をしたいと思うだけです。

それに、パワーがあっても打てない守れないという奴ばかりじゃ、

試合に勝てないでしょう？」

確かに非力であることは認めるものの、

この野球部で控え組に回ることなどありえないと、

自分の野球センスには自信を持っていた私。

殴られるのは覚悟した上で必死の屁理屈でございます。

しかし、何故か大男は私を殴ることはありませんでした。

その目は、反抗的な小僧に対する怒りに満ち溢れておりましたが

恐らく、こいつを殴ってもややこしくなるだけだとも思っていたのでございましょう。

ここで、キャプテン沼田再び参戦。

「監督。僕らもレギュラーは競い合って勝ち取るものだというのは分かっています。」

「ただ、それなら全員で競い合わせてください。」

畑中が言うように、パワーがあっても打てない守れないでは試合になりません。」

来月に大会が控えているのに、今までのレギュラーが4人も抜けるのは不安です。」

「全員で練習をさせてください。」

「ワシの言う通りにはできんという事か？」

「・・・いえ、そういうわけではありません。」

「じゃあ、バッティング練習の順番はどうするんじゃ？」

ワシの言うとおりのパワーのあるもんから順番に打つんか？」

なんでこの大男はそこにこだわるかな・・・。

「出来れば上下の秩序もありますし、今まで通りの順番でやらせてもらいたいのですが。」

ただ、明日からは今まで参加していなかった1年生も全員加えま
す。」

「上下の秩序？」

・・・ふん、じゃあそれでやったらええわ。

ただ、いつまでも好きなように出来るとは思わないよ。」

大男はかなり不満気ではありましたが、沼田さんの申し出を渋々了
承。

整列していた部員たちは声を合わせて

「ありがとうございます!!」

と、大男に一礼。

。今考えると、何故大男にお礼を言ったのかよく分かりませんが・・・

何はともあれ、

この件で部員たちと監督の間に大きな亀裂が入ったのは明らかでございました。

(つづく)

ゝ 戦いの火蓋 ゝ

大男の強権発動はとりあえず免れたものの、

監督と部員の間にはギクシャクとした空気が流れ始めた我が野球部。

しかし野球部としてはとりあえず監督の指導の下で動くことになる
わけで・・・

そして、ベンチプレス事件の翌日から指導の名を借りた嫌がらせが
始まったわけで・・・

真っ先にそのターゲットになったのは何を隠そう私なわけで・・・。

その日は、前日のゴタゴタもあり何となく重い空気が漂う練習でございました。

まず事が起こったのは、

その順番に大男からイチヤモンがついたフリーバッティングの練習中です。

前日のキャプテンの申し入れ通りレギュラーから先に打つ形で進んで

3年生のレギュラーが打ち終わり、

私がバッターボックスに入って打撃練習を始めようとしていると、

「おい、ちょっと待てい。」

それまでパイプ椅子に腰掛けて黙って見ていた大男に呼び止められました。

「はい？」

「お前は2年生じゃないんか？」

「はい、そうです。」

「まだ打つとらん3年生がおるじゃないか。」

大男の言う通りです、フリーバッティングはレギュラーから先に打つのがそれまでの慣例。

私は2年生ですがレギュラーですので、

3年生の控えの先輩よりも先に打つことになるのです。

「はい・・・。」

「じゃあ、お前は後回しじゃないか。」

え・・・？

私が、この大男にどう言えがいいのだろうと考えあぐねていると、

キャプテンの沼田さんが駆け寄ってきて助け舟を出してくれました。

「監督。昨日申し上げて監督も許可してくださったので、

フリーバッティングの順番は今まで僕たちがやっていた通りでやらせてもらってます。

畑中はレギュラーですので、控えの選手よりも先に打つのは
今までの僕たちのやり方なんです。」

「おい、お前はもう忘れたんか？」

「何をですか？」

「ワシが来る前にお前らが勝手に決めたレギュラーなんか白紙じゃ言うたじゃろう。」

それに、お前は上下の秩序が大事や言うたじゃないか。」

ええ、前日キャプテンは確かにおっしゃいましたが・・・。

「ほんなら3年生より2年生が先に打つというのは、おかしな話じゃろうが。」

「それは……。」

キャプテンの沼田さんは、申し訳なさそうに私の方に顔を向けられました。

「沼田さん、いいですよ僕は後で打ちますから。」

実際、私は打つ順番なんぞどうでもいいと思っておりまして、これ以上キャプテンに嫌な思いをさせるのも申し訳ないので、そう言ってバットをグローブに持ち替え守備につきました。

この時の私は、確かにイラッとはしておりましたが、

これが、大男の私に対する嫌がらせの始まりにすぎないのだという
事実には

全く気づいてなかったのをごさいます。

（うづく）

ゝ 標的 ゝ

レギュラーは白紙！ということで

バッティング練習の順番を控え選手よりも後に回された私。

この時点では、順番だけの問題だということで
とりたてて気にはしておりませんでした。

でも、その日のその後の練習、

レギュラーが白紙となると困るのはシートノックでございます。

シートノックとは、各々がそれぞれの守備位置についてノックを受ける練習、

なのですが、レギュラーが白紙ということは

今まで守っていたポジションについていいものなのかどうか・・・。

で、シートノックを始める前にキャプテンの沼田さんが

監督の大男に尋ねました。

「監督、今までのレギュラーは関係ないということですが、

シートノックのポジションはどうすればいいのでしょうか。」

すると、大男はちっとだけ考えて、

「そうじゃな、とりあえず今までのポジションにつけい。」

と一言。

それを聞いて、今までのポジションに散らばる部員たち。

私も自分のポジションであるサードへ。

前日まで、シートノックには参加していなかった1年生は

自分の希望するポジションへつくことになりました。

各ポジションのレギュラーの後ろに

一人から三人の控え選手がつくといった感じでシートノックの準備が整うと

ノックバットを持ってゆつくりとホームベース付近に歩いていく大男。

私はその大男を見ながら、サードの控えで3年生の大田さんと話をしておりました。

「大田さん、先に受けてくださいよ。」

「え、なんで？」

本来シートノックは先にレギュラーがノックを受けて、

その後に控えの選手が受けるというのが流れ。

つまり、今までは先輩の大田さんより先に私がノックを受けていた
のでございます。

「フリーバッティングからの流れだと、俺が先にいったら何か言われ
そうじゃないですか。」

「いや、今までのポジションにつけて言ったんだから

とりあえずは、今までのレギュラーで行くってことだろう。

お前がサードのレギュラーなんだからお前が先でいいって。」

「そうですかねえ・・・。」

多少不安を抱きつつも、大田さんに言われるがまま

私は先にノックを受けるべく、サードの定位置につきました。

そしていよいよシートノック開始！

ほとんどのチームがそうだと思いますが、シートノックはサードから順番に行います。

つまり、私が真っ先にノックを受けることになるわけで。

しかし、そうすんなりとシートノックが始まるはずがありませんでした。

大男はノックバットを片手に私を睨みつけると

「おい、お前は何回同じ事を言わせるんじゃない。」

ほらきた・・・。

「お前は2年生じやろうが、何でお前がレギュラー面して先に受けようとするのか！」

・・・やっぱりですか。

この時私は、

嫌がらせの対象として自分が真っ先にノミネートされたのかもな、

ぐらいに思っております。

例のベンチプレスの中で、非力にも関わらず、しかも2年生のくせに大男に対して反抗の態度を見せたのが気に食わなかったのでしょうか。

私は、とりあえずその場を穏便にやりすごそうと、

黙って守備位置から退きました。

入れ違いに、私の肩をポンとたたいて

申し訳なさそうにサードの守備位置につく大田さん。

私のせいとか何というか、部員たちの間に流れる重い空気。

で、大男の初ノックでございます。

赴任してきてからずっと、野球の指導歴に関しては謎だった大男。

私らの中にはこの時点で、完全な素人なのかもという勝手な推測もあり

ノックで豪快な空振りでも見せてくれるのでは・・・などという期待もありましたが、

よく考えたら、高校の体育教師です、

授業ではソフトボールとかもあるわけで、

ノックくらいはそれなりに出来て当然の事でございます。

さらに後で分かったことですが、40代半ばの大男は私らの高校に来る前、

長い教師生活の中で1度だけ野球部の顧問になったことがあったのだそう。

（その高校は滅多に勝利をあげることのない、

私らをものぐ弱小校でございましたが・・・

。

という事で、それなりの打球でシートノックスタート。

大田さんがそれなりにさばいて、さあ私の順番です。

が・・・。

その時、大男が私に言い放った言葉は、

私が大男の嫌がらせの標的であることを確信させるものでございました。

ゝ 突然のコンバート ゝ

シートノックの順番を後回しにされ、

控えの大田さんの後にサードの守備位置についた私。

大男からの冷遇で、テンションは下がりまくりでございましたが、

「さあこい!!」

と一応、高校球児らしく大声で気合を入れて構えます。

それに対して大男は、ノックをする構えも見せず私に一言。

「お前、今日からしばらくショートで練習せい。」

・・・は？

いきなりのコンバート指令でございます。

あまりの突然のことに私は

「はい？」

と聞きなおしてしまいました。

「サードには3人もおるのに、ショートには1人しか守っとらんじやないか。

バランスが悪いから、お前はショートにまわれい。」

確かに大男の言うとおり

全部員がこれまでのポジション（1年生は希望のポジション）につき、

各ポジションとも2人から4人ずつという感じに分かれたものの、

何故か1年生にはショート希望の者はおらず

守っているのはレギュラーの浅井さんだけ。

サードには大田さんと私、そして1年生の高田の3人。

それで大男いわくバランスが悪いという事なのですが、

それを言うなら、3人以上守ってるのはセカンドもそうだし、

外野なんかそれぞれ4人以上いるし、

ほんでもって、しつこいようですが私はサードのレギュラーです・
・だったし！

数のバランスをとるだけのために誰かを動かすなら

まだポジションが確定していない1年生を動かのが自然な話。

納得するのにはそれなりの材料が必要でございます。

ですが私はすでに諦めムードで、その後の展望を推測しておりました。

私の推測は、まず半年ほど前に私がレギュラーに昇格したときの振り返りから始まりました。

そもそも私は中学生の頃はショートを守っていたわけで。

高校に入ってから当初はショートで1年上の浅井さんと

レギュラーを争うべく練習しておりました。

しかし、当時の3年生が抜けて新チームになったある日の練習後の事です。

私は、新キャプテンの沼田さんと当時の監督の澤地先生に部室に呼ばれました。

そこで話されたのは、

部員全員のレベルを考えた場合、私をレギュラーに昇格させたいということ。

しかし、私と実力が均衡しているショートの大田さんを控えにまわすのは

戦力的にもったいないので避けたいということ。

で、サードの大田さんは実力的に私と浅井さんより劣るので

大田さん本人にも納得してもらった上で控えにまわってもらい、

私にサードを守らせるということ。

そういう話し合いがもたれた上で、私はサードに移り
その後レギュラーとして試合にも出場していたわけで。

で、現在のチーム事情に戻ります。

客観的に見ても、私と浅井さんの実力は均衡したまま、
大田さんが少々遅れをとっているというのも変わらず・・・。

そして、私がショートに移った場合ですが、

大田さんはめでたくレギュラー獲得ということになりますわね。

で、私が先輩の浅井さんからショートofレギュラーを奪い取るには誰もが納得できるくらいの、

浅井さんを上回る実力と実績を見せつけなければならないわけで。

5月末に行われる次の大会までは約1ヶ月、

夏の甲子園大会の県予選までは約3ヶ月、

半年もの間サードを守っていた私が、

その間ずっとショートでレギュラーを張っていた浅井さんを相手に

ショートのポジションをかけて張り合うには

あまりにもハンディが大きく、時間も無さ過ぎる・・・。

つまり、この状況では、

3年生の浅井さんが2年生の私の控えにまわることは考えにくいわけ……。

あれ……？

ということは、このままいけば私は補欠ですか！？

それはまずいっ！……！！

などと思いながらも、

その場で大男の指令を無視して波風を立てるのはとりあえず避けよう、

私は、他の部員たちの気の毒そうに見つめる視線を感じながら

重い足取りでショートポジションへ向かったのでございます。

(~ ~ ~)

「辞める？」

大男の理不尽なコンバート指令を受け

とりあえずショートの控え的な扱いでシートノックをこなした、その日の練習後。

私は、悪夢のような出来事を早く忘れてしまおうと

さっさとユニホームを脱いで制服に着替えておりました。

公立高校の弱小野球部に与えられた部室は狭く、全員は入れないため、

毎年3年生の部員だけが使用しておりますで、

他の部員は、

一般の生徒が体育の授業の時に使う更衣室で着替えをするのが慣例でございます。

2年生、1年生の部員の誰もが私に気を使っているかのように黙り込んだままの着替え。

すると、ユニホーム姿のままの沼田さんが更衣室の扉を開けました。

「・・・畑中、ちょっと部室に来てもらっていいか。」

「・・・。」

部室に呼ばれて何の話をされるのかは大体の検討がつかず。

でも私は、今日のことは出来るだけ早く忘れたかったわけで・・・。

しかしキャプテンの呼び出しに応じないわけにはいきません。

「・・・はい。」

私は他の部員の重い視線を感じながらキャプテンと部室に向かいました。

部室に入ると、3年生の先輩方はまだ全員ユニホーム姿。

恐らく、今日の出来事について皆さんで話をされていたのでしよう。

しばらくの沈黙の後、口を開いたのは大田さんでございます。

「畑中、ごめんな・・・。」

「・・・え？」

大田さんから謝罪を受ける筋合いなどない私は少々とまどいました。

大田さんは今にも泣き出しそうな顔。

「俺な、自分でもお前より下手なのは分かってるんだ。

だから、チームのためにもお前がレギュラーでサード守るのが当然だと思ってる。

それなのに・・・。」

この人は、いい人すぎる……。

「……大田さんのせいじゃないじゃないですか。」

私は他に言葉が見つかりませんでした。

またしばらくの沈黙の後、沼田さんが口を開きます。

「畑中、俺たち3年生は全員このままじゃいけないと思ってる。

元々ショート希望だったお前に無理言ってサードに移ってもらったのに……。」

いや、確かにショートからサードに移れと言われたときは

多少拒否反応もございましたが、

どちらかというどレギュラーになれるならいいか、くらいに思ってたんですけど・・・。

「俺がタイミングを見て監督と話し合ってみるから、

申し訳ないけど、しばらくは辛抱してくれ。絶対辞めるなよ。」

・・・はい？

・・・辞める？

他の先輩方も次々と続きます。

「辞めたらそれで負けだからな！」

「ここまで一緒に頑張ったんだ、絶対辞めるなよ！」

「お前が辞めることはないって!!！」

「絶対チャンスはあるから、辞めるな!!！」

・・・いや、ちょっと待ってください。

私今の時点で“辞める”なんてこと、これっぽっちも考えてませんが・・・。

それに、なんか先輩たち熱すぎる・・・。

「・・・分かりました、ありがとうございます。お疲れ様でした。」

私は、部室の熱い空気に耐えられず逃げるように部室を後にしました。

今考えると、自分の性格からして

この時に“辞める”ということ全く考えていなかったというのは不思議でもあります。

もしかしたら、すぐにレギュラーに戻るかと思っていたのかもしれないし、

そこまで深く先のことを考えていなかったのかも・・・。

で、先輩たちに“辞めるな！”と言われた後の家までの帰り道、
考えていたのは大田さんのことでした。

大田さんは月並みな言い方ですが、ものすごく努力家で。

1年生の時からサード希望で練習を積まれていたわけで。

それが、上級生が抜けてレギュラーになれるチャンスが来たと思っ
たら、

後輩の、しかも元々ショート希望だった私にレギュラーを譲る形に
なり。

その際には当時の監督の澤地先生とキャプテンの沼田さんと話し合
われて

大田さんも納得されたということなのですが、

実際の所の心境はどうだったのでございましょう。

形としては、監督とキャプテンにレギュラー失格の宣告を受けたわけ。

恐らく落ち込みもしたでしょうし、

私に対しても複雑な感情を抱いても当然でございます。

しかし、それから大田さんは私に優しく接してくださいましたし、後輩の控えに甘んじても、これまで一生懸命練習に励んでこられたわけで。

それを考えると、私がサードのレギュラーを大田さんに譲ることになったとしても、

そのタイミングで退部するなどという、非礼な事が出来るはずないわけで・・・。

ともかくにも、私の中にこの時点で“辞める”という選択肢はなかったでございます。

しかし、状況的には何とかしなければ

私の高校野球生活に暗雲がたちこめるのは目に見えており・・・。

でも、しばらくは何の打開策も見つけられないまま

つらい日々を過ごすことになるのでございます。

(つづく)

（ 優遇と冷遇の間・・・ ）

数日前まで順風満帆な高校野球生活を送っていた私。

それが突然、レギュラー降格のピンチという最悪の事態に陥ったわけ。

しかし若輩な高校球児には中々決定的な打開策を見つけれなかったわけ。

現状のままではマズイと思いながらも、どうすることもできず

理不尽な監督の指導の下で、ぐっと我慢の日々。

しばらくすると、私たち部員の間では監督の大男のことを

“ジャイ”というニックネームで呼ぶことが定着いたしました。

見てくれが往年の人気レスラー、ジャイアント馬場に似ているというのもあったのですが

どちらかというと、その傲慢振りが

人気アニメ『ドラえもん』のイジメツ子キャラ、ジャイアンに通ずるものがあるというのが

命名の理由でございます。

しかし、国民的アニメの人気キャラクターの名をそのまま与えるのは気がひけるので

“ジャイ”だけ。

ジャイの傲慢ぶりは練習の指導にもありありと表れるものでございました。

その指導法というのは、根性と懲罰を前面に打ち出した古いタイプの体育会系。

別に体育会系の指導が悪いというわけではないのですが、

ジャイの場合、どうしても理不尽ぶりが目立つものでございまして・
・。

たとえば、フリーバッティングの場合。

ジャイはふたつ並んだバッティングゲージの後方にパイプ椅子を持
ってきて

キャッチャーの後ろから練習を見る形で腰掛けます。

しかし、その位置から技術的なアドバイスを送るわけではございま
せん。

何をするかというと、ストライクとボールの判定をするのでござい
ます。

そして、バッターがストライクを見逃そうものなら

それが、たとえボール気味の際どいコースであっても、

「おい！何で今の球を打たんのじゃ！」

と怒号をあびせ、

「ストライクを見逃した罰じゃ！ケンケンでグラウンド一周してこんなかぁ！」

ということで、その選手は

その時点でバッティング練習を強制終了させられて

片足跳びでグラウンド一周という懲罰を課せられるのでございます。

まあ、ストライクを見逃すまいという集中力を養うということであれば

百歩譲って納得も出来ようものでしょうが、

いかんせん、ジャイのストライクゾーンが滅茶苦茶！

しかも、ここでもベンチプレス事件が尾を引いておりまして、

ジャイお気に入りのパワフル組に対してはストライクゾーンが狭くなるのに対して、

非力組に対しては、驚くくらいストライクゾーンが広くなるわけで。

ということは、ジャイの判定のサジ加減で

パワフル組のバッティング練習時間は長くなり、

非力組のバッティング練習時間は短縮されるという

優遇と冷遇の差が歴然としてくるのでございます。

そして、ありがたいことに私には

誰よりも広いストライクゾーンが与えられたわけでございます・
・。

つく

（

ゝ 誤審 ゝ

ストライクを見逃せば、その時点でバッティング練習終了！

さらに、もれなく片足跳びでグラウンド一蹴という懲罰の特典つき！

という状況で、バッターボックスの私に与えられたのは

ジャイが設定した、独創的ともいえるとてもなく広いストライクゾーン。

どれくらい独創的かと申しますと・・・、

私に対してバッティングピッチャーから低めのコースへ投じられた
投球、

これは低い！と判断した私は自信を持って見送ります。

すると、白いボールはキャッチャー手前でワンバウンドしてキャッ

チャーミットへ。

明らかにボール球でございます。

ところが、後方からジャイの怒号が・・・。

「おい、今のは際どいコースじゃないか！

ストライクやいわれども文句言えん様な球を簡単に見逃すな！」

え・・・？

際どい？

ワンバウンドしたのに？

とりあえず、ワンバウンドした球はストライクとは言いづらくともこんな感じで何かしらイチャモンがつくのでございます。

で、こうなると気を使うのはバッティングピッチャーの方でして。
ワンバウンドでも際どいという判定ならば次も低めに投げるとヤバイ・・・

ということ、じゃあもう少し高く投げようと思うのが心情でございます。

しかし、そういう時は往々にして裏目に出ることが多いもので、
バッティングピッチャーが次に投じた球は

一般的なストライクゾーンのはるか上、私の目線の上を通過するの
でございます。

もちろん、

高めに大きく外れたと判断した私は見送るのですが、

そのとたん・・・

「今のはストライクじゃろうがあ！ケンケンしてこおい！！」

と、なるのでございます。

どうやら私がバッターボックスに入ると、ストライクゾーンは上は頭のとっぺんから下はつま先にいたるまでに広がるらしく、

「いや、今の球は目線より高かったんですけど・・・。」

などと異論を申し立てようものなら。

「お前は試合中に、そうやって審判に文句言うんか？」

いや、そんな高い球をストライクと判定する審判なんかいないと思います。・・・。

と、思いながらも

それ以上反抗しても無駄ということで、

不服ながらも片足跳びの懲罰を受けることになるのでございます。

多くの部員たちは、懲罰を嫌い

多少のボール球でも強引に打ちに行くという

異常なバッティング練習の光景が続く日々。

それでも、頑固な私は

そんな練習が何のためになるのか！

と、頑なにボール球は見逃し、その度に懲罰の片足跳びを課せられ
続け・・・。

また、この頑なな私の態度が

ますますジャイの反感を買うことになったわけで。

もう、ジャイと私の関係は険悪になるばかりでございました。

ゝ 連帯責任 ゝ

バツティング練習に懲罰があるならば

当然、守備練習にも懲罰があるわけで。

シートノックの際には誰かがエラーを犯すと

「おい、××のせいでノックは中断じゃあ！

全員ウサギ跳びでグラウンド一周してこい！！」

という、ジャイの怒号を受け

連帯責任ということで、

ウサギ跳びでグラウンド一周という罰が全員に課せられるのでございます。

まあ、このシートノックもバッティング練習同様、

エラーか否かの判定はジャイのサジ加減。

ジャイのお気に入り部の部員かどうかによって

その判定に明らかな差が生じるのは避けられません。

元々レスリングをやっていて筋トレバカのジャイが

ノックバットを力任せに振り回して繰り出す打球は

正面のゴロであってもグローブを弾くことも多いという難敵。

ジャイは、自分の意にそぐわない部員には

そんな強烈な打球を容赦なく見舞い、エラーを誘発させるわけで。

でも逆に言えば、お気に入り部の部員には、

それなりの打球で無難にさばかせようとする意思が丸見えなので、その分、エラーをして懲罰を受ける心配は減るはず・・・

・・・なのですが、

ここでネックになるのが、連帯責任という古いタイプの体育会系のノリ。

特に可愛そうなのは、最下級生の1年生部員でございます。

何せ、自分がエラーをすれば

そのせいで3年生、2年生の先輩も全員懲罰を受けることになるのですから、

そのプレッシャーは相当なものでございましょう。

ノックを受ける前から1年生たちは緊張でガチガチ。

そんな、体が強張った状態なものですから、

簡単にさばけそうな打球でもエラーをする確率は高まりますわね。

そして、一度1年生の誰かがエラーをしてしまうと

本人はもちろん、

その後にノックを受ける1年生部員のプレッシャーは割り増しされるわけで。

日によっては、エンドレスなエラー地獄にはまり、

守備練習の時間にもかかわらず、

うさぎ跳びばかりで終わってしまうということも珍しくなく・・・。

そんな、つらい守備練習でございましたが、

その中で、私がジャイから受けた仕打ちというのがまた・・・。

(づゝく)

〈 蚊帳の外 〉

誰かがエラーをすれば、連帯責任ということで

全員ウサギ跳びでグラウンド一周という懲罰付きのシートノック。

自分の意にそぐわない部員には

エラーをさせるべく力任せの強烈な打球を見舞うジャイ。

そんな中、ありがたい事に誰よりもジャイから目の敵にされていた私は

また違った類の嫌がらせを受けていたのでございます。

ジャイの指令を受けショートにコンバートされた私。

ショートのレギュラーの浅井さんが強烈な打球をさばいた後、負けじと華麗な守備を見せつけてやろうという意気込みで、

「さあ、はい！」

と、一応気合いを入れて構えます。

ところが、そんな私にジャイが放った打球は

何とも気合の抜けたスイングで、目をつぶってても取れそうなほどの力なく正面に転がってくるゴロ。

・
・
・。

その瞬間、凍りついたように立ち尽くす他の部員たち。

私は、目の前に転がってきた打球を難なくさばいてシートノックは次の選手の順番。

ジャイは、特にレギュラー扱いで意にそぐわない選手には

これでもかと言わんばかりに力任せの打球を放ち、

エラーをしようもんなら

「そんなんも取れんでレギュラー面しとるんかあ!!」

××がエラーしたから、全員でウサギ跳びしてこおい!!」

という罵声を浴びせ、

部員は全員でウサギ跳びでグラウンド一周。

そんな感じでシートノックが一巡して、再び私の順番。

「さあ、こい!!」

と、一応気合を入れて構えます。

ところが、ジャイが放つ打球は再び

何とも気合の抜けたスイングで、目をつぶってても取れそうなほどの力なく正面に転がってくるゴロ。

再び、凍りついたように立ち尽くす他の部員たち。

・・・なるほど、そうきましたか。

シートノックの最中に繰り返されるこの光景。

つまり、私はシートノックの練習中

ひとり蚊帳の外的な扱いを受けていたわけで。

これは、力任せの強烈な打球を見舞われるよりもつらいわけで。

練習で自分の実力を見せつけて

レギュラーを奪い取るチャンスすら与えられないという

非常に厳しい状況なわけで・・・。

毎日の練習後、私は先輩や同級生の部員たちから

「ツライだろうけど、キレるなよ。」

とか、

「こんな無茶苦茶な事、いつまでも続くわけないから！」

とか、

「俺たちもやれる事はやってやるから、辞めるなよ！！」

などという、慰めや激励のありがたい言葉を頂くのが

日課のようになっておりました。

そして、そうこうしているうちに

我が野球部は新監督体制になって初めての

練習試合を行うことになったのでございます。

(つづく)

ゝ 言えません ゝ

我が野球部の練習の締めくくりは、部員全員が学年ごとに横一列
つまり3列を作って並び、監督とグラウンドに

「ありがとうございますあ!!」

という感謝の声とともに一礼して解散。

1、2年生は手分けしてグラウンド整備と後片付けという段取りでございしました。

まあ、どこの野球部も似たような感じだとは思いますが、

小学生の頃に野球を始めてからずっと教えられ続けてきた

仲間や監督はもちろん、グラウンドや道具にも感謝するべしという精神は、

スポーツを通じて学ぶ最も素晴らしいものだと思います。

とはいえ、この時期の私には

監督に対しての感謝の気持ちなんぞ微塵たりともなかったのですが・
・。

で、ジャイの監督就任から2週間ほどが過ぎようとしていた

土曜日の練習後のことでございます。

いつものように、ジャイとグラウンドに一礼をして部員が解散しようとしたとき、

「あ、言うのを忘れとったわ。」

と、部員を引き止めるジャイ。

整列しなおす部員たち。

「明日は練習試合じゃあ。

10時に△△農業がここに来るから、お前らは9時に集合して準備しとけい。」

・・・そりゃまた、突然なことすな。

ていうか、もっと前もって言つときゃいいものでしょうが。

という感じで、おおいに戸惑う部員たち。

何せ、ジャイの就任以来

練習時間の大半を占めていたのは、

すっかり悪球打ちが身についたバッティング練習と、その懲罰の片足跳び。

そして守備練習の懲罰のウサギ跳びでございます。

試合を想定した実践的な練習などほとんどやっていないのですから、急に試合と言われて、部員たちが戸惑うのも当然のことでございますしょう。

でも、その時私が考えていたのは全く別の事でございました。

何かと申しますと、親父の事。

というのも、私の親父は結構な野球好きでございまして、

息子である私が小学生の頃に野球を始めてからは

練習試合であれ大会であれ、ほとんどの試合に観戦に訪れていたのです。

（まあ、それは私の親父だけではなく他にも毎試合見に来る保護者はいましたが。）

そんな親父ですので、

「明日は練習試合がある。」

などと言え、張り切って観戦に来るのは目に見えております。

しかし、高校に入ってから熱心にはば全試合の観戦に訪れていた親父だけに

ちょっとややこしいかなと・・・。

つまり、親父は私が1年生の秋からレギュラーで試合に出ている姿を見ていたわけで・・・、

で、私が話していないので当然ですが、

親父はまだ自分の息子が現在の野球部で置かれている状況は知らないわけで・・・、

ただ、練習試合を見れば全てが分かるわけで・・・。

息子の現状を知った親父がどう出るかというところまでは

私には想像しかねるものでございましたが・・・。

とりあえず、私は練習試合のことは親父に知らせないことにいたしました。

(つづく)

（試合開始！いろんな意味で・・・）

ジャイが監督に就任してから初めての練習試合当日。

以前ジャイが赴任していて監督と知り合いだということ

我が高校のグラウンドにジャイが招いた△△農業は、

実力的には我が野球部と同じ、いや少々劣るくらいで

普通にいけば10回やれば8回は勝てるくらいの相手でございます。

試合前1塁側ベンチに陣取った私たちを前に

ジャイが打順の1番から読み上げる形で先発メンバー発表。

ええ、もちろん私の名前が呼ばれることはありませんでしたが、何

か？

私以外の先発メンバーは、意外というかなんと言うか

それまでのレギュラーメンバーを主体とした、

それほど波乱をよぶものではございませんでした。

つまりは、私だけが極端にジャイに嫌われているというのが

浮き彫りになったわけで・・・。

まあ、これは予想通りのことでしたし

親父に練習試合のことを言わなかったのは正解でございました。

そして試合開始。

とりあえず私は、ベンチの隅で他の控えメンバーとともに試合の状況に合わせて、選手たちに声をかけておりました。

で、試合の方はいえは序盤から思いもよらぬ一方的な展開へ。

3年生エースの宮川さんが初回からボコボコの滅多打ち。

まあ、滅多打ちとはいえ打球としてはボテボテのゴロ。

飛んだコースも、決して取れないコースではないのですが、

何せ我が野球部の野手陣、

連日ジャイから執拗に受ける片足跳びとウサギ跳びの懲罰のおかげで

ほぼ全員筋肉痛。

足の動きが重いもんで、正面以外の打球は

面白いように野手の横を抜けていくのでございます。

ほんでもって、その中に程よくフォアボールやエラーが絡むという
典型的な大量失点のパターン。

力ない打球が野手の間を抜けたり、エラーが出るたびにジャイは

「何やっとなるんじゃない!!」
あ!!!」
そんなんも取れんのか、バカタレが

などと、試合中にも関わらず感情的な怒号をあげます。

その度に、

「そりゃ、あんたのせいでしょうが・・・。」

と、ベンチの控えメンバーはジャイへ冷たい視線。

そうこうしてる間に試合は6回まで進み

0対7と圧倒的敗戦濃厚なムード。

普通にやれば勝てない相手ではないものを・・・。

そして、予想外な試合経過に

単細胞的な感情を抑えられないジャイの怒りの矛先は、

突然こちらへ向けられたのでございます。

(つづく)

ゝ 嵐を呼ぶ練習試合 ゝ

いわば格下の相手との練習試合で、6回までに7点もの大量失点で敗戦ムード。

まあ、ここんところ練習時間のほとんどは懲罰の片足跳びとウサギ跳びに費やされ

そのおかげで、部員たち皆の下半身は肉離れ寸前。

と、いうのを考えれば予想できないことではないんですけどねえ。

監督のジャイも指揮らしい指揮をとれるわけもなく、

守備の時はエラーをした選手に対して

「気合い入れて守らんかあ!!」

と、野次ともとれるような声を浴びせ。

攻撃の時には

「思いつき振り回せい!!」

の、一点張り。

そこには何の戦術も見当たりません。

この状態で、試合に勝とうというのは中々難しゅうございます。

しかし、ジャイはどうしても納得がいけないらしく

試合も終盤に差し掛かった頃、とうとう動き出しました。

それは自軍の選手たちが7回の守備についた時でございます。

ジャイはベンチの隅に陣取っていた、私を始めとする控えの選手たちの方を見て、

「おい。」

と、声をかけました。

おやおや、今さらながら選手交代ですか？

と思ったのも束の間でございました。

「お前らは、何をやっとなるんじゃ？」

はい？ 何をと言われても・・・、強いて言うなら控えてますが・・・。

「お前ら補欠がそんなところにおっても何の役にも立たんのじゃあ！
試合をぼーっと見とる暇があったら、筋トレでもやっつけやあ！
！」

えっ・・・！？

それってもしかして・・・、

ただの八つ当たりでは・・・？

それとも、

試合を見ているだけでは何の役にも立たない私たちが筋トレをやり始めると、

奇跡の逆転劇が見られるとでも？

もはや反抗する気も起こらず

私ら控えメンバーは、試合中にも関わらずグラウンドの隅で

筋トレを始めることになったのでございます。

そして、試合の方と言いますと、

私ら控えメンバーの必死の筋トレの甲斐なく

その後もさらに失点を重ね、0対12で無残な状況。

練習試合なのでコールドはなしにしましょうという

試合前の取り決めが、悲しい結果を生んでしまいました。

グラウンドの隅で黙々と筋トレに励んでいた元レギュラーの私は
もしかしたらの期待も虚しく最後まで出番なし。

結局、監督のジャイは最後まで戦術の指示を出すことも

サインを送る事もないまま・・・だったのですが、

最終回の攻撃でやらかしてくれました。

1アウト、ランナーなしから最後っ屁のような代打攻勢。

まずは、3番のセンター川尻さんに代わって2年生の山上。

続いて、4番のファースト沼田さんに変わって1年生の松崎。

そう、代打に送られた二人は

ベンチプレス事件の際、部員の中で最も重いバーベルを持ち上げ、ただそれだけで本人らが戸惑うほど、ジャイから優遇され続けている二人でございます。

結果は、あえなく連続三振でゲームセット。

この二人、確かに体格もよくパワーもあるのですが

中学生、いや小学生の頃からレギュラーになった経験はなく、

1年生の松崎はもちろんですが、

2年生の山上も、この試合が高校に入って初出場。

通常ならば、3番、4番というクリーンナップの選手の代打として
登場する事など

考えられる二人ではないわけで。

しかし、この時はすでに大差で試合結果は見えておりましたし

部員の皆もそれ程抵抗感はなかったのですが・・・、

この代打攻勢が、数日後に小さな嵐を巻き起こす事になるのでございます。

(つづく)

ゝ 山上の告白 ゝ

格下の相手に大敗を喫した練習試合。

翌日からはチームのムードもさらに悪くなるばかり、

ジャイの横暴ぶりもさらにひどくなるばかり、でございました。

そんなある日の練習後のこと、

ユニホームを着替えるため更衣室へ向かおうとしていると、

山上に呼び止められました。

「畑ちゃん、ちょっと話があるんだけど。」

山上は、私だけではなく

同級生の2年生部員全員をグラウンドの隅に呼び寄せました。

私たちを前に、深刻な顔の山上。

「俺、野球部辞めようと思うんだ。」

山上の言葉は、冗談には思えませんでした。

「俺さ、自分でも野球が下手なのは分かってるんだ。

それなのに、体が大きくて力があるってだけで

バッティング練習は先輩たちより先に打たされるし、

こないだの練習試合だって、本当なら俺なんか出れるわけないのに・・・。」

山上の突然の告白に、黙ったままの私たち。

考えてみれば、確かに山上もつらい立場だったのかもしれませんが。

野球の実力的には部員の中でも劣る方にも関わらず、

ジャイからはレギュラークラスの先輩よりも優遇されるという状況。

山上が精神的に苦痛を感じるのも当然でございましょう。

日本全国に何万人も存在する高校球児。

もちろん、ほとんどの高校球児が目指すのは甲子園という大舞台なのだと思います。

しかしすべての高校球児がそうかというと、私はそうは思いません。

中には私がそうだったように、

甲子園は夢のまた夢と諦め、自分の丈にあった高校の野球部で

それなりに試合に出られればいいという考えの高校球児もいるでしょうし、

中には、実力的にレギュラーになることすらかなわなくても、

ただ野球が好きだから、試合に出られなくても

野球部にいるだけでいいという考えの球児もいると思います。

そして山上は、間違いなくレギュラーになることなど考えていないタイプでございました。

考え方は人それぞれです。

はなから甲子園出場を、はたまたレギュラー獲得すら諦めてしまうというのは

根性がなく、高校球児の精神にもとると感じる人もいるかもしれません。

でも、それぞれ目指すもののレベルが違って

楽な練習だけで3年間を終えられる野球部などほとんどないと思います。

どこの野球部も、それなりに厳しい練習を積むのでございます。

レギュラーにすらなれないと自覚している選手が

レギュラークラスの選手と一緒に厳しい練習に耐えるというのは、

それはそれで、すごい精神力だと思います。

もしかしたら、楽で楽しい練習だけで

野球を楽しむ事に徹する方針の野球部もあるかもしれません。

それは、それぞれの考え方です。

言ってしまうえば、野球部も高校の部活動のひとつでしかないのですから。

ただ、我が野球部は

甲子園を目指しているわけではないしろ

それなりに厳しい練習を積んでおりました。

で、結局のところ何を言いたいのかと申しますと、

山上は、レギュラーになることはないと自覚しながらも

私らと一緒に、毎日厳しい練習に耐えてきたわけで。

それは、かなりの根性の持ち主だという証だと思うわけで。

そんな山上が「辞めたい」と言うくらいですから

かなり精神的に追い詰められていたのだろいうことは

予測がつくわけで。

そんな事を考えると、

山上にかける言葉が見当たらず皆しばし沈黙。

ところが・・・

「お前ふざけんなよっ!!」

山上に厳しい言葉を浴びせたのは古木でございました。

(つづく)

ゝ 説得 ゝ

「野球部を辞めたい。」

山上の突然の告白に、沈黙したままの私たち2年生部員。

ところが、ひとり山上に厳しい言葉を浴びせた古木。

「お前ふざけんなよっ！辞めるなんて甘ったれた事言うなよ！！」

「・・・ふざけてなんかないよ。」

古木のものすごい剣幕に、泣き出しそうな声の山上。

「じゃあ、どういふつもりなんだよっ!!」

「……。」

黙り込んでしまった山上を、古木はお構いなしに責め立てます。

「お前なんか畑中に比べたらマシじゃないか！」

練習は普通に出来るし、試合にだって出られるし。

畑中は、本当はレギュラーなのに補欠扱いされて、

あんなに滅茶苦茶やられて、それでもガマンしてるんだぞ!!」

思わぬところで自分の名前を出された私は少々驚きました。

「・・・そりゃ畑やんは滅茶苦茶辛いと思うよ。でも、俺だって辛いんだよ。」

俺なんか練習したって上手くなるわけないって分かってるのに

バッティング練習は先輩よりも長い時間打たされるし、

こないだの練習試合だって、俺なんかが代打で出ても

何の役にも立たないって分かってるのに・・・。」

やはりジャイの理不尽な差別待遇は、

優遇されている側にしてみても辛いものだったようでもあります。

「それで誰かお前に文句言ってきたのかよっ!!」

先輩たちだって俺たちだって、誰もお前を責めたりしてないだろ

う。」

「でも・・・、もしかしたら俺がいなくなれば

畑やんだって、また試合に出られるようになるかもしれないじゃないか。」

「そんなの関係ねえよっ!!」

あれだけやられてる畑中がガマンしてるのに、

お前が辞めるなんて言うのは、甘ったれてるだけだっ!!」

日が暮れかけたグラウンドでのやりとりは、まるで青春ドラマのようでした。

が、いつの間にか討論の主題となってしまうていた私の頭の中に鳴り響いていたのは

あの名曲のワンフレーズ・・・、

けんかをやめてゝ

ふたりをとめてゝ

私のためゝに 争わないゝで

もう これ以上ゝ

(♪けんかをやめて

b y河合奈保子

作詞..竹内まりや)

・・・ちょっと古いですか？

「とにかく、今辞めるなんて俺は認めないからなっ!!」

古木は、そう言い捨てて更衣室へと去っていきました。

何とも重い空気のままグラウンドに取り残された私たち。

またもや皆沈黙でございます。

空気に耐え切れず口を開いたのは私。

うつむいたままの山上に声をかけます。

「古木はさ、せっかくここまで一緒にやってきたんだからって事を言いたいんだと思うよ。」

俺もさ今のところ辞めるつもりはないし、別に俺のことはどうでもいいんだけど、

もう一回よく考えてみたら？」

山上は黙り込んでいました。

うつむいたままでしたのはつきりとは見えませんでした、

泣いているようでございました。

そんな事があった翌日、山上は私たちの説得の甲斐あってかいつも

通り練習に参加。

私も古木も、他の2年生部員も何事もなかったかのように山上と接することになりました。

これで、とりあえずは一件落着。

・・・と、思いきや、

諸悪の根源であるジャイは、また新たな火種をまくことになるのでございます。

($\sim$)

ゝ 背番号 ゝ

山上の退部騒動も人知れず解決した直後の事でございます。

ある日の練習後

数週間後の5月末に控えている大会に向けて

レギュラーメンバーが発表されることとなりました。

まあ、メンバーを決定するのはジャイですので

この大会で私がレギュラーとして出場することなどあり得ないというのは

分かりきっていたわけで。

ジャイはメンバーを発表する前に、こう言いました。

「今までの練習とこないだの練習試合でお前らの力量を見て、今の段階でベストメンバーを組んだ。」

ん？

力量を見て？

ベストメンバー？

つい最近までレギュラーだった私は

ここのところ練習もまともにさせてもらってませんし、

練習試合は出場すらさせてもらってませんが？

背番号1番から順番に選手の名前を読み上げるジャイ。

そして、

「・・・背番号5、サード大田。 背番号6、ショート浅井。」

予想通り

元々レギュラーポジションだったサード、コンバートされた後のショートの両方で

私の名前が呼ばれることはございませんでした。

まあ、予測していたことですので、私にはこの時点でそれ程のショックはなく、

とりあえずベンチで声援でもおくつとくかくらいに気持ちを切り替えていたのです。

・・・ところが。

ジャイの嫌がらせは、私の予想を超えておりました。

その後もジャイは背番号順に選手の名前を読み上げます。

そして私の名前が呼ばれないまま、背番号18番までが確定。

・・・大会のベンチ入りメンバーは18名です。

つまり、私は背番号なし。

次の大会でベンチ入りすら出来ないことが決定したわけで。

私はこの時、体中の血がものすごいスピードで頭にかけていき、自分の頭の血管が切れる音が聞こえたような気がいたしました。

ちなみに、背番号17番は2年生の山上。

背番号18番は1年生の松崎。

何度も言いますが、野球部員であるものの

あまり野球が得意ではないというタイプのふたりでございます。

誰も納得できないメンバーの選抜。

しかし、こんな事をやって何事も起こらないわけはありませんでした。

(555)

く ちよつとだけ反省 く

5月末の大会では、ベンチ入りすら出来ないことが確定した私。

その前の3月の大会では背番号5を背負い、

サードでレギュラー出場していたのを考えると、ものすごい落差で
ございます。

メンバー発表を終え、解散して道具の後片付けやグラウンド整備をし
ている時も、

恐らく私は落胆と怒りで皆が近寄りがたい雰囲気をかもしだしてい
たのでしょう。

数名の先輩方は

「何もしてやれなくて、ごめんな。」

とか、

「あまり深刻に悩むなよ。」

などという、慰めの言葉をかけていただいたような気もしますが、ほとんどの部員が私に声をかけることはなかったように思います。

はっきりと断定出来ないのは、

あまりにショックだったのか私はこの日の練習後の事をあまり憶えていないのです。

私もいくらジャイが横暴とはいえ、まさかそこまで徹底的にやってくるとは思っておりませんでした。

ジャイからしてみれば、よっぽど私は典型的に気に入らない選手だったのでございましょう。

それは十分に分かっておりました。

事の始まりのきっかけは、最初のベンチプレス事件の際に

私が反抗的な態度をとったことにあります。

その後が始まった、私に対するジャイの仕打ちの数々。

その目的は、その仕打ちに私が屈してジャイに詫びのひとつでも入れ態度を改めた上で、

絶対服従の姿勢を見せることだったように思います。

もしかしたら、早いうちに私が泣きながらジャイに謝罪し、

その上で練習では見せかけだけでも、何くそ的な根性っぽいものを出して

ジャイの旧体育会系的な指導に従う姿勢を見せていれば

事態はすぐさま終息の方向に向かっていたのかもしれませんが。

考えてみれば高校球児が監督に従うのは当然なわけで、

その辺は、私にも非があったのかなあとも思ったりしたことあったような無かったような・・・。

でもね、私にはどうしてもジャイの言動が納得出来なかったし、指導者としてジャイのことを受け入れることが出来なかったのです。

で、そんな私の練習態度というのがまたジャイの神経を逆撫でしていたようでして。

元々体育会系のノリの根性的なものを持ち合わせていなかった私ももちろん必要な練習は一生懸命にやります。

しかし一生懸命にやっても、それが中々表情に出ないタイプなのでございます。

その上ジャイの指令、特に全く必要性を感じない懲罰系の指示に関しては

無表情で淡々とこなしておりました。

それが恐らくジャイの目には反抗しているようにも映り

反省するでもなく悔しがるでもなくといった感じに見える私の態度が相当気に食わなかったのでございましょう。

私にも改める点はあったのかもしれませんが・・・。

ただ、この時の私は

日に日にジャイへの不信感が募るばかりでどうしようもございませんでした。

($\sim$ $\sim$ $\sim$)

ゝ 親父怒る! 〵

大会のメンバー発表を受けて、家へと向かう帰り道。

私は、レギュラーではなくなった事、それどころかベンチ入りすら出来なくなった事を

親父にどういう風に説明しようか考えておりました。

私が小学生の頃に野球を始めてから

練習試合も含めてほぼ全試合の観戦に足を運ぶ程の熱心な親父でございます。

出来れば次の大会のことは親父に知られずにやり過ごしたいところなのですが

何せ親父は高校に入ってから、全試合を観戦し大会の日程も全て把握しておりますので、

そういう訳にはいかないでございます。

しかし、そんな親父に、レギュラーから外されてベンチ入りすら出来ないなどと告げれば

当然どうしてなのかという理由を問われるでしょうし、

そうになると、全てとはいかないまでも私がジャイから受けた仕打ちを

ある程度は説明しなければいけないわけで。

それは、面倒くさいというか気が重いというか・・・。

で、とりあえず親父に知らせるのは追々時期を見てからにしよう
と決めて家へと帰りました。

しかし、そう上手くはいかないものでございます。

家族そろって晩飯を食べていた時のこと、親父が私に話しかけてきたのです。

「祐希、もうそろそろ大会だよな。」

何ともドンピシャなタイミングの親父の問いかけに、私は一気に食欲がなくなりました。

「こないだの大会は2回戦負けだったからな、次はその上を目指さないと駄目だぞ。」

黙り込んだままの私。

話し続ける親父。

「監督変わってもやっぱりお前の打順はまた1番なのか？」

それなら何が何でも出塁する気でいかないな。」

出塁どころか出場すら出来ませんが・・・

などと思いながら黙り込んだままの私。

さすがに、親父も私の異変に気づきます。

「ん？どうしたんだお前、なんか暗いな。何かあったのか？」

私は、ベンチ入りすら出来ないというのはあまりにもショッキングだと思ったので、

とりあえず、レギュラーではなくなった事だけ話すことにいたしました。

「・・・あのさ、俺は次の大会レギュラーじゃなくなったんだ。」

一瞬黙り込む親父。

そして、私の気持ちを探るように静かに話し始めます。

「どういうことだ？　じゃあサードは誰が守るんだ？」

「大田さん。」

「大田くんてお前。去年新チームになる時、大田くんがサードじゃ不安だからって、

お前がショートからサードに移されたんじゃないか。

こないだの大会もお前がサードを守っていたのは権藤監督も知ってるんだろう？

それともなにか？大田くんが急に上達して、お前より上手くなったっていうのか？」

黙り込む私。

「レギュラーは監督さんが決めるもんなんでしょう？ぶつぶつ文句言っただけ仕方ないじゃない。」

控えても、代打とかで試合に出られるかもしれないし

それで活躍すれば、またレギュラーになれるかもしれないんだから頑張るさよ。」

普段は野球の話など興味なさそうなのに、珍しく絡んできた母親。

全てを話さなければいけないような雰囲気させる何とも間のいい絡みで話します。

私は意を決して、なるべく落ち込んでいない振りを装って話しました。

「・・・それもない。次の大会は俺はベンチ入りもしないんだ。」

それを聞いて、えっ？という感じで黙り込む母親。

「ベンチ入りもしないってどういうことだ!!」

予想通り、親父は一瞬にしてエキサイト気味でございます。

「そんなもん、こないだまでレギュラーだったのにいきなりベンチ入りからも外れるなんて

お前はそれで納得できるのか！

それともなにか、お前何かやったのか？お前に何か問題があるのか!？」

「俺は何もやってないよ。」

私はジャイが来てから数週間の出来事を親父に説明するのがとても面倒くさく感じて

また黙り込んでしまいました。

すると親父は、

「お前が話さないなら、ちょっと古木さんに電話して聞いてみる。」

そう言って、電話の方へ向かいました。

親父と古木の親父さんは、野球部の保護者の中でも熱心なふたりで、お互いに息子が1年生の秋からチームの主力になっていたこともあり、

普段から交流があったのでございます。

「やめてくれよ。電話してどうすんのさ。」

「どうするかは話を聞いてから考えるさ。」

本当にお前に非がないんなら、俺はあの監督をぶっ飛ばしてやりたいくらいだよ！」

親父が監督をぶっ飛ばす？

170センチにも満たない身長で、ほとんど運動経験のない親父が？

レスリング出身で180センチ以上の大男であるジャイを？

そんな負け戦に親父の身を投じさせるわけにはいきません。

「俺だって納得なんてしてないさ。ただ自分で何とかするから、しばらく放つといてくれ。」

私は親父にそう言って何とか説き伏せようとしたが、

「そんなもん放つとけるか。」

そう言うと、親父は古木の家へ電話をかけました。

その電話は、1時間近く続きました。

古木の親父さん、そしてどうやら古木とも話をして、

ジャイが来てから今日までのある程度のいきさつを聞いていたよう
でございます。

電話を切った親父は私のそばへ来て静かに尋ねました。

「お前大丈夫なのか？野球部辞めたいなんて思ったりしてないか？」

「・・・いや、野球は好きだから。」

「・・・ならいい。だけど、どうしても我慢出来なくなったら辞め
てもいいんだぞ。」

そういうと、親父は自分の部屋へ入っていきました。

親父が電話で、どの程度の事を聞かされたのかは分かりませんでしたが、

ジャイに対してかなりの憤りを感じていたように見受けられました。

小学生の頃に野球を始めて、なかなか思うようにいかず私が何度か辞めたいと弱音を吐いた時は

断固として認めなかった親父。

その親父に「辞めてもいいんだぞ。」と言われた夜。

何故か、絶対に野球部を辞めてはいけないと思った夜でございました。

(つづく)

＼ 嫌な予感 ＼

さて、監督のジャイにとことん嫌われて落ちるとこまで落ちた私。まずは復権へ向けてどう動くか、言わば生きる道を模索しなければなりません。

この時点では、

「自分で何とかするから放つといてくれ。」

と親父にも言った手前、自力で何とかしなければという思いでございました。

その手段として考えたのは大きく分けると2つ。

ひとつめは、私がジャイに全面降伏し飼いだのように服従を誓うこと。

ふたつめは、いくらジャイでも理不尽な補欠扱いが出来ないように
これでもかと言わんばかりに実力を見せつけること。

意外と頑固な性格の私。

ジャイに服従するというのは到底出来るわけがありません。

と、なると残された道は

実力を見せつけてレギュラーを勝ち取るという、言ってみれば当たり前の方法しかないわけで。

しかし、次の大会でベンチ入りすら出来ない私は練習でも完全に補欠扱いということだ

それまでにも増して蚊帳の外感が増し、

実力をアピールする事など不可能に近くなっていたわけで。

とりあえず好機が訪れるのを待つしかないという、悶々とした日々が続いておりました。

そうこうしている内に、あっという間に大会が三日後に迫った日の事でございます。

我々部員は、ジャイに確認しないといけない事がございまして。

それは、試合当日の移動手段。

なんせ私が住んでいたのは、学校から最寄の駅まで徒歩で30分という地方の片田舎。

学校から試合が行われる球場までは、車で移動するしかないのでございます。

ということで、試合がある日は予定のつく保護者が車を出しあって全部員を球場まで連れて行くのが通例となっておりました。

試合が行われるのが休日の場合はそれ程問題はないのですが

高校野球の大会というのは平日に試合が行われる事もあるので、

その場合、保護者の方も都合を合わせるのが大変なのでございます。

で、三日後に迫った試合の日は平日。

ここらへんで、保護者の予定をすり合わせてもらって車の台数を確保する必要があるわけで。

いつも車を出していた私の親父も、

私がベンチ入りしないにも関わらず観戦には来るつもりのようで、

「何時頃学校を出発するのか確認しといてくれ。」

と、言われていたところでございました。

で、キャプテンの沼田さんが練習後にジャイにその旨を伝えたのですが、

ジャイの返事は、

「ああ、次の試合は保護者の車は必要ないわ。

平日で台数そろえるのも大変じゃろうからな。」

えっ？

また、何かが起こりそうな雰囲気・・・。

キャプテンの沼田さんがジャイに確認をとります。

「じゃあ、球場まではどうやって移動するんですか？」

「大丈夫じゃあ。20人乗りのマイクロバスを借りれることになったから、

ワシが球場まで運転していくわ。」

・
・
・

マイクロバスですか・・・。

・
・
・

・
・
・

・
・
・
ん？

・
・
・
20人乗り？

何か嫌な予感でございます・
・
・
。

(
っ
づ
く
)

ゝ めざせ決勝戦・・・ 〵

試合当日の学校から球場への移動は、マイクロバスに乗っていくというジャイの通達。

しかし、ジャイいわくマイクロバスの定員は20名。

野球部の部員は28名、各学年に2人ずついる女子マネージャーを加えると

総勢34名になるのですが・・・。

キャプテンの沼田さんがジャイに確認をいたします。

「じゃあ、バスに乗れない部員は保護者の方の車で送ってもらおうに

お願いすればよろしいですか。」

「そんなもんいらん。」

えっ？

・・・じゃあ、他の部員は歩いて30分かかる最寄の駅から電車に乗って移動ですか？

と思った矢先のことです。

「試合にはバスに乗れる人数だけ行ったらええ。」

ベンチ入りの人数は18人じゃないか、

マネージャーも3年生の二人だけおったらええじゃろ。」

えっ？

「試合の日は平日で授業もあるじやろうが、試合に出んやつまで来る必要はないわ。」

なんですとおー！？

がんばれキャプテン沼田！！

「監督。大会の試合が平日の場合、野球部員全員が授業に出ずに球場に行くのは

学校からも認められているはずですが。」

「そんなもん決めるのは監督のワシじゃ。」

キャプテンの抗議も一蹴でございます。

試合に出ている選手からすれば、

スタンドの仲間から送られる声援は励みになるものでございましょうし、

控え部員も、試合に出ずとも共に戦うつもりで仲間に声援を送るものでございます。

マネージャーと同じ気持ちでございましょう。

それなのに、試合が行われる球場に行くことすら出来ないなんて・・・。

これは、部員もマネージャーも納得できるわけがございません。

で、不満げな私らに対するジャイの言葉が・・・、

「安心せえ。決勝戦には全員連れて行ってやるから。」

決勝戦！？

・・・この男は一体、どこの野球部の話をしているのでございましょう。

田舎町とはいえ、大会に出場する高校は60校以上。

決勝進出するためには、それまでに5つ程の勝ち星が必要なわけで。

私らは、100年近い学校の歴史の中でも

3回戦進出が最高という万年弱小公立進学校でございまして・・・。

こないだの大会も2回戦負けという結果でございまして・・・。

自分らで言うのもなんですが我が野球部が決勝戦に勝ち進むなんてことは、

我が野球部以外の高校が全て出場辞退してくれるくらいでない

有り得ないことでございまして・・・。

私らは、またもジャイの嫌がらせとしか思えない指令の下で

大会に挑むことになったのでございまして・・・。

$(\sim \cup \sim)$

ゝ 気苦労 ゝ

大会が行われる球場へ行くのは、ベンチ入りする部員と3年生のマネージャー2人だけ。

だって、移動用にジャイがレンタルしたマイクロバスは定員20名ですから。

はなから20人しか連れて行かないつもりでバスを借りたのか、

借りたバスの定員が20名だったから、20人しか連れて行かないという事になったのか、

ジャイの真意のほどは分かりませんが・・・。

いずれにせよ、今まで通り保護者に車の提供をお願いすれば、

全員球場へ行けるというだけの話でございます。

しかし、試合に出ることもない補欠部員と1、2年生のマネージャ
ーは

球場へ行く必要はないと。

いつもは、平日の試合であっても協力してくれる保護者の車の提供
も必要はないと。

つまりこの大会、試合に挑む我が野球部の選手たちを

スタンドで応援する人間は全くいないということでございます。

ジャイいわく、

「決勝戦には全員連れて行く。」

という事らしいですが・・・。

念のために言っときますと、

この時点では全部員がジャイに反抗的なわけではございませんでした。

私のようにジャイの言動や行動を全否定するものもいれば、

ジャイの無茶苦茶な指導にはそれなりの理由があるはずという前向きな考えの下、

従順に従う部員もいたことは事実でございます。

したがって、この時も

「決勝戦には・・・」

というジャイの言葉に対して、

自分たちの奮起を促しているのではないかと、好意的に受け取る部員もいるにはいました。

・・・私にはとてもそうは思えませんでした。

・・・その答えも、すぐに分かるのですが。

いずれにせよ、試合の日には球場に行くことすら出来ないということが決定した私。

また、親父には知られたくない事実でございます。

仕事を休んでまで部員の送迎に車を提供するつもりで親父を、

何とか当日は球場に行かせないようにしなければなりません。

保護者の車の提供は必要ないというジャイの意思を伝えればいいのですが、

伝え方を間違うと、ややこしい事になりそうな内容でございます。

私は多少ニュアンスをにぎしながら話をすることにいたしました。

試合に出る可能性のない人間は球場に行く必要はないというくだりは全くなかったことにして、

まず、試合が平日なので保護者に迷惑をかけるからという部分だけを抜き取り、

出来るだけ好意的にとれるように親父に話して聞かせました。

その上で、私が試合に出ることはないのだから

仕事を休んでまで観戦に来る必要はないのではないかという事を必死に説明。

何とか、親父から

「まあ確かに、お前が試合に出るわけでもないのに

平日に仕事休んでまで観に行く事もないか・・・。」

という言葉を引き出し一安心。

この頃の私は、ジャイのお陰で色々と気苦労が絶えない日々を送っていたのでございます。

(つづく)

く 話しかけるなっ!! く

さて、いよいよ大会の試合当日でございます。

その日に球場へ行くことすらかなわなかった私は、

教室のいつもの席に座っていたわけで。

私はその朝

球場へ行かないことを親父に気づかれないようにするために、

学生カバンは部屋に置いたまま、

ユニホームや野球道具を詰め込んだバッグだけを持って登校いたしました。

まあ、教科書やノートはほとんど教室の机の中に入れていたので全く支障はないのですが、

何とも気が重い登校でございます。

なぜ気が重いかと申しますと、もちろん

大会の試合当日にもかかわらず球場へ行けないというのが最大の理由でございます。

しかしその理由はもうひとつありました。

それは、キャッチャーでレギュラーである古木と私が同じクラスであるということ。

当然古木は授業を欠席することになりますので

この日が野球部の大会の試合日だということは

クラスメイトの全員が知るところでございます。

そして、野球部の大会の試合日にも関わらず私が教室にいるとなると、

何となく嫌な展開が予想されるわけで、

そして、それは私が席に座った瞬間に予想通りになったわけで。

クラスメイトの中でも、

野球部と同じグラウンドで練習をしているサッカー部やラグビー部の連中は

ある程度は現在の野球部、

そして私が置かれている状況というのを知っている状態でございます。

ですので、そういう連中は私が教室に姿を見せると、

多少気を使った様子で、それでも普段の朝と同じように接してきてくれたのでございます。

しかし何も状況を知らない他の生徒は、なぜ私が教室に現れたのか分からず

遠巻きに不思議そうに私のことを見ておりました。

そんな連中に理由を聞かれていちいち説明するのは苦痛以外の何物でもございませんので、

私は、自分の席に座ると

“俺に話しかけるな！オーラ”

を強烈に発することにしたのでございます。

異様なオーラを感じとり、ほとんどの生徒は私に近寄っても来なかったのですが・・・

「あれ？今日は野球部って試合じゃねえの？何してんだよお前。」

私の“話しかけるなオーラ”をもろともせず近寄ってきて、

何の遠慮もなしに話しかけてきたのは、

公立の進学校には数少ない、いわゆるヤンキーなクラスメイトの梅木でございます。

こういうタイプの人間は人の気持ちよりも自分の好奇心の方を優先するものでございまして。

「お前試合に行かなくていいのかよ？」

古木は来てないのに、何でお前ここにいるわけ？」

梅木に私の様子を察する気配は全くございません。

彼とは小学校からの同級生で、決して悪気があって言っている訳ではないというのは

承知しているところではあるのですが……。

「なあ、どうしたんだよ。」

あ、あれかお前、もしかして野球部辞めちゃったのか？」

矢継ぎばやな梅木にさすがに、イラッ!!とした私。

「うるさいよお前はっ!どっか行けっ!!」

私の怒鳴り声に、一瞬驚いた様子の梅木。

静まり返った教室の中、クラスメイトでラグビー部員の広田とサッカー部員の三木が

私の席のほうへ慌てて駆け寄ってきて、

梅木を後ろから羽交い絞めするような格好で引きずりながら、

私の目の前から連れ去っていきました。

その後私は、放課後までほとんど自分の席に座ったまま

休み時間も授業中も、より強烈な“話しかけるなオーラ”を発し続け、

誰も寄せつけなかったのでございます。

それはそれはとても長く感じられる一日でございました。

(~ ~ ~)

〕 試合結果は・・・ 〕

強烈な“話しかけるな！オーラ”を発し続けたおかげで、

梅木以外の生徒を全く寄せ付けないまま過ごし、すべての授業が終わった放課後。

私が下校しようと教室を出ると廊下の窓の外には、

野球部員の乗った20人乗りのバスが試合を終えてグラウンドへ帰って来たのが見えました。

特に試合結果が気になるわけでもないし、ジャイと顔を会わせたくもないし、

ということで別にそのまま家へ帰ってもよかったのですが、

私は何となくグラウンドの方へ行くことにしたのでございます。

グラウンドへ行くと、部員たちがバスから降りて道具を片付けている最中でした。

誰も喋ることなく黙々と片付け作業を行っている部員たち。

その暗い表情からは、その日の試合結果が安易に推測できたわけで・
・・。

しかし、私はとりあえず古木に確認をいたしました。

「負けたのか？」

私の問いかけに、言葉を発することなく小さくうなづく古木。

そこへ、恐らくトイレにでも行っていたのであろうと思われるジャ
イが戻って参りまして、

部員たちに向かって一言。

「お前ら何をモタモタやっどるんじゃあ。」

試合に負けたんじゃないから、とっとと片付けて全員でグラウンド10周してこんかぁ！」

また、懲罰ですか・・・。

と思っていたと、ジャイがふいにこちらを見て私にも一言。

・・・。

「お前もおるんなら皆と一緒にグラウンド10周してこい。」

もう、いちいち腹を立てるのも馬鹿らしく思える程になっていたジャイの理不尽な指令に従い

ユニホームに着替えた私は、他の部員たちとグラウンドを走りながら、

試合の様子を古木から聞いておりました。

「ボロ負けだったのか？」

「・・・いや、2対1。」

対戦校と我が野球部の実力は五分五分。

と言うことは、勝つか負けるかも五分五分。

それは、試合前から全部員が認識しておりました。

その上で、2対1というスコアでの惜敗。

試合に敗れて誰もが悔しいのは分かりますが、

スコアの割にはあまりにも暗すぎる部員たちの表情。

そこからは、悔しさだけではない何やら異様な雰囲気を感じ取られました。

「惜しかったんじゃない。それにしても皆落ち込み過ぎじゃないか？」

「・・・皆怒ってんだよ、多分。」

「・・・何かあったのか？」

「・・・ジャイの奴、またやりやがったんだ・・・。」

そう話す古木も、悔しさと怒りが入り交じった表情でございました。

($\sim$)²

ゝ 我慢の限界 ゝ

スコアだけを見れば、2対1と惜敗だった大会の試合結果。

しかし、その試合では

球場に行くことすらかなわなかった私には分からない

何かが起こっていたようでございまして。

「今日は、ジャイが余計な事しなけりや多分勝てていたんだ。」

そう言う古木は、敗戦の懲罰のランニングの間、試合の様子を私に聞かせてくれました。

どうやら敗戦以上に皆が悔しく、怒りさえ感じているのは

試合中のジャイの采配にあるようでございます。

まあ、采配と言っても細かい作戦など考えられないジャイは

「思いつきり打てい!!」

とか

「気合を入れんかあ!!」

とかいう、何とも大雑把な指示を出すくらいでして、

我が野球部はバントやら盗塁やらの細かい作戦なしに

4回裏に相手のミスがらみで何とか1点を先制。

しかし、その後2点を奪われ逆転を許し1点をリードされたまま

試合は最終回、9回裏の我が校の攻撃まで進んだのだそうでござい

ます。

「でさ、ワンアウトでランナー2、3塁っていうチャンスに打順は3番の川尻さんだぜ。」

「どう考えても同点には出来ると思うだろ？」

という古木の意見はごもつともでございまして。

単純に、その状況ならば

とりあえず同点に追いつくための作戦として、まずスクイズというのが考えられます。

当然、相手も警戒してくる場面ですので100%とは言えませんがかなりの高い確率で1点を奪う事は出来ると思います。

もし、スクイズ失敗という事態を恐れるならばバッターに打たせるしかないのですが、

に、しても内野ゴロでも3塁ランナーがスタートをうまくできれば1点が入るし、

外野フライでも犠牲フライで1点入る、

ヒットならば当たりによっては2塁ランナーまで生還し

一気に逆転サヨナラという何ともありがたい状況。

しかも、バッターはクリーンナップの3番川尻さん。

最悪でも、内野ゴロぐらゐは打てるバッターでございます。

ところが・・・、

「そこで、ジャイの奴が出てきたわけさ。」

という、古木に私は尋ねました。

「・・・出てきたって、どういうこと?」

「前の練習試合の時と一緒に、理解不能の代打攻勢。」

そう、同点に追いつくチャンス、うまくいけば一気に逆転サヨナラのチャンスという場面で、

ジャイは、あの練習試合の時の悪夢を蘇らせたのでございます。

3番バッターの川尻さんの代打に2年生の山上。

続く4番バッターのキャプテン・沼田さんの代打に1年生の松崎。

代打に送られた山上と松崎は何度も言っておりますが、体格がよく力持ちというだけで

本人らも困惑するくらいジャイから優遇を受けている二人でございます。

野球の実力に関して言えば、

本来ならベンチ入りメンバーに選ばれている事すら疑問符がつくくらいのこの二人に、

何かを期待するというのはあまりにも酷な事でございまして。

で結果はといいますと、

練習試合の時と同じように連続三振でゲームセット。

古木の

「ジャイが余計なことしなけりゃ勝てた・・・。」

という言葉も大袈裟ではないような気がいたします。

そりゃ、ジャイが動かず川尻さんと沼田さんがそのまま打席に立っていたとしても、

もしかしたら、二人とも凡退で敗戦という可能性もあったというのは否定できません。

しかし、レギュラーでクリーンナップの二人が凡退して敗れるのと、

その二人の代打として打席に立った山上と松崎の連続三振で敗れるのでは、

部員の納得度が全く違うというのは明らか。

それは、恐らく山上と松崎も重々感じ取っていた事だと思います。

「こないだは練習試合だったからまだいいけどさ、今日は大会だぜ。

先輩たちもそろそろ我慢の限界じゃねえかな。

それに、山上と松崎の落ち込みよう見てたら不憫だわ。」

古木の言葉を聞いて、私らの後ろを走り続けていた山上と松崎の方に目をやると

二人ともうつむき加減で、その顔は若干青ざめているようにも見えました。

そして、翌日から山上と松崎が練習に来ることはありませんでした。

ジャイから身の丈に合わない優遇を受け続けていた二人にとっても

この辺りが我慢の限界だったようでございます。

＼ 追い風の予兆 ｝

ジャイの理不尽な扱いに耐えかね、とうとう山上と松崎が退部。

そんな事実を受けても、ジャイはその原因が自分にあることなど思
いもよらぬといった様子。

それどころか、どちらかという横暴振りはパワーアップした感が
ございまして。

どうパワーアップしたかと申しますと、

「今までは、お前らが決めたレギュラーいうのを尊重してオーダー
を組んどったが、

それでは中々勝てんから、新戦力を見つけないやあないのお。」

という、自分のノープランな采配ぶりを気持ちいいくらい棚に上げ
た発言と共に、

“新戦力の発掘”というキャッチフレーズの下、

練習内容において3年生と2年生の部員を虐げ、

1年生部員を優遇するという行動に出たのでございます。

その理由は単純明快。

結果的に二人の部員を退部に追い込んだ、大会での無茶苦茶な采配を受けて、

3年生と2年生の部員の大半が

ジャイの指導に素直に従えないという態度を示し始めたからに他ありません。

自分に従えない者は切り捨てるという方針を一貫するジャイの姿勢はここまでくるとお見事でございます。

我が野球部にはますます暗雲が立ち込め、

どこまで行けば光明を見出せるのか検討もつかないという日々。

そんな中、私の周りではある環境の変化が起こってありました。

どういふことかと言いますと

昼間、授業の合間の休み時間などに私は色々な先生方から

話しかけられることが多くなってきておりました。

その内容というのが、

「畑中、なんか大変らしいけど大丈夫か？」

とか、

「悪いことばかりは続かないから、前向きにな。」

とか、

「お前、野球好きなんだろう？　その気持ちがあれば何とかなるから。」

などなど、どうやら野球部の現状を知っているような様子で

私の行く末を心配していただいている様な言葉ばかり。

この時点では、何故急に先生方がそんな言葉を私にかけて下さるようになったのか

その理由は定かではございませんでしたが、

それが明らかになるのにそう時間はかかりませんでした。

いずれにせよ、これは私にとって追い風が吹く予兆だったのでございます。

(つづく)

ゝ 噂 ゝ

色んな先生方に、行く末を心配するような言葉をかけられるようになったその理由。

それが分かったのはある日の昼休みのことでございます。

何をするでもなく、自分の席に座り暇をもてあましているところへ古木がちょっと慌てた様子で私のところへ駆け寄ってまいりました。

古木は昼休みに入った直後、

野球部の前監督である澤地先生に呼び出されて職員室へと行っていたのですが・・・。

「畑中、エライことになってるかもしれないぞ・・・。」

「何が？」

「お前が野球部辞めるって噂が広まってるらしいぜ。」

「何で俺が野球部辞めるってだけで、エライことになるんだよ。」

「それがさ澤地先生の話では、最近はお前が野球部辞めるってだけじゃなくて、

停学覚悟でジャイの事を殴りとばして

野球部を辞めようとしてるって話になってるらしい。」

「はあ？」

私はそれを聞いて、何故最近色んな先生方が声をかけてくるようになったのか

分かったような気がしたのですが・・・。

・・・ジャイを殴る？

私が？

身長180センチを超えるレスリング出身のジャイを、

そのジャイから非力扱いを受けている私が殴ったとして

何かしらの危害を加えることが出来ると言うのございましたか？

あ、金属バットで殴りかければそれなりのダメージを与える事は可能かも・・・。

などと言っている場合ではございません。

「で、お前は澤地先生に何て言ったんだよ。」

「俺にはよく分かりませんって言ったよ。」

「お前はバカか？」

「何で？」

「否定をしろよ否定を、はっきりと。」

「……。」

「……。」

とにかくにも、

そんな根も葉もない事で先生方に変な目で見られるのは喜ばしいことではありません。

噂を否定するのはもちろんの事、その前に噂の出所を突き止めてこれ以上変な噂が広がらないようにする必要があります。

一見手間がかかりそうな作業でございますが、私にはすでに犯人の
目星がついております。

(すうく)

ゝ 共闘拒否 ゝ

私がジャイを殴って野球部を辞める。

そんな根も葉もない噂の出所を探るために私が向かった場所、

それは体育館の裏でございます。

そこにいたのは、クラスメイトの梅木とこれもまた同級生の堀内と筒井の三人。

こいつらは、昼休みには人目につかない体育館裏にたむろして

ダラダラと駄弁りながらタバコを吹かしているようなベタなヤンキー達でございました。

「おう畑中、どうしたん？」

ウンコ座りの体勢のまま私を見上げる梅木に、私は単刀直入に申しました。

「お前だろ、俺が野球部辞めるなんて噂流してんの。」

すると、ニヤつと楽しげに笑う梅木。

「あ、あれ違うよ俺じゃない。」

お前が野球部辞めそうって噂は俺も色んな奴から聞いたんだよ。

俺はそれだけじゃイマイチ面白くないから、権藤を殴ってつてい
うのを足してみただけ。」

・・・やっぱり。

こういう連中の、他人の気持ちはどうあれ自分が楽しい事をやりぬ
くという姿勢には

ある意味頭が下がります。

しかし、これは成敗しておかねば・・・。

私はウンコ座りのままの梅木の頭に思いっきりグーパンチ！

「痛っ！！ 何すんだよお前っ。」

「何すんだじゃねえよ。そんな噂流して何が楽しいんだよお前はっ。」

「いいじゃん別に。皆結構驚いてさ、畑中はいつ権藤を殴るんだって楽しみにしてる奴もいるみたいだぜ。」

よくもそんな楽しげにぬけぬけと・・・。

怒り心頭の私は、梅木の頭にもう一発お見舞いしてやろうと拳を振り上げました。

その瞬間、

「やめとけて。」

と、私を羽交い絞めしたのは堀内。

柔道部崩れで、

どこぞの相撲部屋からスカウトでも来そうな程立派な体格の持ち主である堀内に

後ろから羽交い絞めされた私の体は宙に浮くような形に。

それをまた楽しげに見ながら、筒井が言います。

「畑中、お前権藤からかなりやられてるらしいじゃん。

本当にやる気なら、俺たちも協力してやろうか？

俺たちも権藤にはムカついてるからさ。」

この連中が、何故ジャイに敵意を抱いているのかと申しますと・・・。

入学直後から意気投合し何かとツルんで悪さをしていた梅木、堀内、筒井の三人。

公立の進学校では珍しいヤンキーな三人に先生方は手を焼いていたのですが……。

何せ、巨漢の堀内が暴れだすと先生方も手に負えないということで、ほぼ野放し状態だったのでございます。

ところが数週間前にジャイが赴任してから、この三人を取り巻く環境も一変。

他の先生方が恐れをなしていた巨漢の堀内も、

レスリング出身のジャイから見れば文字通り子供扱い。

服装の乱れや悪態をことある毎に口やかましく注意してくる上に、頭を小突く程度は日常茶飯事になっていたジャイに対して

この三人は、フラストレーションを溜め込んでいたのでございます。

まあ、この三人の場合は自業自得感が否めないのですが……。

私の体を開放した堀内が言いました。

「お前もムカついてんだろ？　一緒にやつちゃうか？」

「だから、やらないっての！　とにかく、これ以上変なデマを流すなよなっ！」

私は、三人にそう釘をさして教室へ戻る事にしたのでございます。

そして教室へ戻る途中の廊下、職員室を通り過ぎたあたりでのこと。

「おい、畑中。」

と、後方から私を呼び止める声がいたしました。

振り返ると、声の主は前野球部監督の澤地先生でございます。

「畑中。今日の放課後、野球部の練習に行く前にちょっと職員室に来てくれ。」

・
・
・

⋮

•

•

•

•

•

•

•

何かもう、面倒くさい・・・。

(づく)

く 追い風に乗って・・・ く

私、職員室というのがどうも苦手でございます。

多数の教師がたむろしている部屋へ入ると、別に何か悪い事をしたわけでもないのに

何ともいえない窮屈な空気に押し潰されそうになり、

何故か後ろめたいような不思議な感覚に包まれるのでございます。

ですので澤地先生の呼び出しも出来れば回避したいところでございましたが、

そういう訳にもいかず、私は6時限目の授業が終わると渋々職員室へ馳せ参じることに。

職員室へ入ると、澤地先生は私に部屋の隅の応接用のソファへ座るように促し

先生自身も私と向かい合って腰をかけました。

「どうだ、最近調子は？」

澤地先生は、私の様子を探るように話し始めました。

職員室アレルギーの私としては話が長引くのはごめんでございます。

「先生、話は早めに済ませましょうよ。何か変な噂が広まってるんでしょう？」

「・・・ん？ ああ、まあな。」

他の先生たちも、気にしていないフリをしながら聞き耳を立てているのは

明らかでございました。

「あのね、俺が監督のことを殴って
野球部を辞めるなんてバカなことすることないでしょう。」

「うん、それは分かってるんだが。」

「どうも、お前が権藤先生とうまくいってないっていう話を聞いた
もんでな。」

「実際のところどうなんだ？」

「・・・うまくいっていないというか・・・どうなんでしょうねえ。」

「私は返答に困りました。」

「畑中、何でお前は大会のベンチ入りメンバーにも入ってなかったんだ？」

「何でって言われても、俺には分かりませんよ。」

俺には実力がなくて監督が判断したからじゃないんですか。」

「お前なあ、俺は元監督だぞ。」

新チームになった時に、お前には主力としてやっていてもらわなきゃ困ると思って

コンバートしてまでお前をレギュラーにしたのは俺じゃないか。」

「……。」

「確かに俺は野球の専門家ではないけど、お前の実力は分かってい

るつもりだし、

今のチームでお前が補欠になるっていうのは、信じがたいんだがなあ。

何かあったんじゃないのか？」

気がつくど、他の先生たちもいつのまにか

聞き耳をたてるどころか、澤地先生と私の会話に注目されておられました。

この時、私は何となく自分に追い風が吹き始めているような気がいたしました。

そして、その風に乗ることにしたのでございます。

(つづく)

ゝ 名演技 ゝ

職員室へ私を呼び出した澤地先生はもちろんのこと、

他の先生方も今の野球部の状況、というか私とジャイの関係を気にしていらっしゃる様子。

で、私がどう出るかでございます。

心のうちでは、

ここで全てを話したところでどうなるものでもないというのは分かっています。

せっかく吹き始めた追い風をとりあえず利用してみるのもひとつの手。

私は、ジャイが監督に就任してからの出来事を先生方に話すことにいたしました。

もちろん、追い風を有効に利用するためにジャイに対する私の反抗的な態度は控えめに、

。それでいてジャイの数々の理不尽な仕打ちは若干大げさ気味に・・・

このバランスが難しいところでございまして。

もちろん嘘をつくわけにはいきませんが、嘘はすぐばれるものですか
ら。

まあ、あまり大げさにせずとも

ありのままを話せばジャイの理不尽さは十分に伝わるとは思っていた
のですが。

逆に、ありのままを話したとしてもこんな漫画のような理不尽な
出来事を

他の先生方も全ては信じてくれないだろうなあ、というのがありま
して、

若干大げさに言っておいた方が差し引きでいい具合に伝わるかなと・
・。

で、いつの間にか私と澤地先生を取り囲むような形で聞き入っていた先生方。

私が話し終わるとしばらくの沈黙の後、口を開いたのは数学の瀬川先生でございました。

「畑中の話が本当だとしたら、ちょっとひどいなあ。

でも、いくら監督だからって権藤先生がそこまでやりますかね？」

ええ、ヤツはそこまでやってるんですよ瀬川先生！

続いたのは、私のクラスの担任で生物の島本先生。

「まあしかし、

こないだの大会で畑中がベンチ入りもさせてもらってないというのは事実ですからねえ。

でも……。畑中、お前なんかやったんじゃないのか？」

なんかやった？　・・・まあ、若干反抗的だとは思いますが。

私は何も言わずうつむいておりました。

「いや、確かに権藤先生が何の理由もなくそんな事するとは思えないですけどね、

野球部の顧問だった私としては、畑中がレギュラーから外されるというのは

いずれにしても納得が出来ない事ではあるんですね。」

さすが澤地先生、分かっていらっしやる！

しかし、国語担当の荒川先生が、

「でも畑中を疑うわけじゃないですけど、権藤先生の話も聞いてみないと

今の畑中の話だけでは俄かには信じがたいですね。」

・・・うーん。

ごもつともですが、荒川先生。

ジャイに話を聞いたところでヤツが全てを素直に話すとお思いですか？

しかし、状況が一気に好転することはないとも何かのきっかけにはなるかもしれない、

そう思った私は、先生方に最後の一押しということで軽く一芝居打つことにいたしました。

ソファに座ったままうつむいた状態で、

先生方に見られないように目を思いつきり開いたまま、しばし瞬きをグッと我慢。

そして、眼球が痛みにくらえきれず程よく涙がたまった所でおもむろに顔を上げ、

「これは僕の問題ですから自分で何とかするしかないと思ってます。

それに、先生方が言われるように僕の方にも原因があるのかもしれないし……。」

潤んだ目で訴えかけて、

さらに軽くうつむきながら目を閉じると涙がポロツ・・・とこぼれ落ちると思ったのですが、

中々思い通りにはいかないものですな。プロの役者さんはさすがでございますわ。

しかし、これでも私にしたら一世一代の名演技といっても過言ではないくらい。

そして、この私の殊勝な態度は先生方の同情票を集めるにはそれなりに効果があったようで、

少しずつですが、事態が動くことになるのでございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819c/>

僕たちのプレイボール

2010年10月11日04時38分発行